# 金日成主席と恩師

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

# 金日成主席と恩　師

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

# はじめに

歴史を顧みると、わが師を敬い、その恩義に報いるべく努めた人たちの美談が数多く記録されている。とはいえ、少年時代の師を生涯忘れることなく愛と温情をもって遇した金日成(キムイルソン)主席と肩を並べるほどの傑出した人物は見出せないであろう。

金日成主席が生涯恩師として尊敬し続けた康良煜は、日本帝国主義の植民地支配下彰徳学校で勉強した主席の担任教師であった。

主席がこの学校に通った期間は2年にも満たなかったが、国の解放以後40年近くもの間、変わることなく先生と呼んで敬意を表し、ひいては国家の要職で働き、国と民族に尽くして生きるよう配慮した。

日本帝国主義の軍事的占領下、教育者としての理念は踏みにじられ、人間の尊厳はもとより信教の自由すら認められず呻吟していた彼は、主席の深い配慮を得て、そのことで差別を受けたことは一切なく、人々の尊敬を受けながら有意義な生を送ったのである。

実に金日成主席と康良煜の親密な人間関係は、気高い道義の高い境地をまざまざと見せ、同時に、誇らしくも意義ある生とはどのようなものであるかを知らしめてくれる貴重な手本である。

康 良 煜
(1904. 12. 7—1983. 1. 9)

# 目 次

# 1. 祖国の解放後、国づくりの途上で

# 人生の春

数十年にわたる悪逆無道な日本帝国主義の軍事的占領と植民地支配が終焉を告げて解放の日を迎えた朝鮮は、全国が万歳の歓呼にどよめいた。植民地支配下の苦しみにあえいでいた人たちの喜びはたとえようもなく大きかった。

康良煜は平壌で解放を迎えた。ラジオ放送で日本の降伏を知った彼は、その衝撃的なニュースに胸を打たれわれを忘れていたが、それは束の間で、一目散に教会へ駆けつけて鐘を激しく打ち鳴らした。彼はこのようにわが歓喜を吐露したのである。

解放の喜びに歌い踊るわが人民は、国の解放をもたらした金日成将軍の凱旋を今か今かと待った。

平壌市と平安南道の各階層代表は、金日成将軍歓迎準備委員会を構成して、歓迎大会を催すべく奔走した。

平壌駅前の広場には、将軍用の演壇もしつらえてあった。

大同郡の住民は、将軍を故郷万景台に真っ先に迎えるべきだとし、誇りと期待に燃えて、金日成将軍歓迎郷土準備委員会を別途に作っていた。

洪命熹、呂運亨、許憲ら人望の高い有志たちも金日成将軍歓迎準備委員会を設けて、盛大な歓迎儀式を行う計画を立てていた。

康良煜は、金日成将軍の一日も早い平壌到着を待った。当時、一部彼の知己は、やがて朝鮮に共産政権が樹立するから宗教者は迫害される、だから米軍が進駐するソウルへ行こうと誘った。けれども彼は誘いに応じなかった。彼は共産主義者でもそのシンパでもなかったが、動揺はしなかった。金日成将軍に対する思い出が尋常でなかったこともあろうが、それ以上に塗炭にまみれたはらからの運命を救った民族の救世主に心服していたがゆえの決心であった。





とはいえ、キリスト教の教職者である自分に白い目を向けていた人々を思うと、この先のわが運命について憂慮せざるを得なかった。

1945年10月中旬、彼は平安南道成川郡に出向いていた。教徒たちの信仰心を固める一方、教団の拡大をはかり、教会の財力を強化すべく、年に1、2度開かれていた成川地区復興会が、近在の牧師、長老、教徒たちを集めて、数日間集会を催していたのである。集会は参加者が1千余名を数えるほど規模が大きいものだった。

会議の5日目、康良煜の長男が訪ねてきて、金日成将軍がお呼びですと言い、早く早くとせかした。

気性の穏やかな、ことばかずの少ない康良煜は、ふだん、わが感情を面に表すようなことはほとんどなかったが、この時ほど興奮し、あわてたのは初めてだったという。

高鳴る胸を抑えもやらず、彼は、金日成将軍に初めて会った20余年前の忘れがたい日のことを思い浮かべた。

1923年4月のその日は、彼が彰徳学校で教鞭をとっていた時だった。

彰徳学校は1908年、主席の外祖父康敦煜が青少年に朝鮮語の読み書きと歴史、地理などの教育を施し、愛国心をはぐくむべく、有志の助力を得て、七谷に設立した私立校であった。

ほかならぬこの学校で、朝鮮に生を享けた男児なら当然朝鮮を良く知らなければならないという父親の意を体して、中国の八道溝から生まれ故郷万景台までただ一人で千里（日本の百里）の道を歩いて帰った10代初めの主席が教育を受けたのである。

## 1．祖国の解放後、国づくりの途上で

この日、学校の校監康敦煜は、一人の少年を伴って職員室に入ってきた。少年は若き日の金日成主席であった。

康良煜ら教員たちの視線は、校監が入学手続きをするようにとして紹介した少年に一斉に注がれた。

まだ紅顔の少年とはいえ、度量と温和の気がそこはかとなく漂う広くもすがすがしい額、なみなみならぬ英知を秘めた目の光、さわやかな顔立ちと印象的なえくぼ、落ち着いた身のこなしなど、どれ一つとして凡庸なところがなかった。

彰徳学校職員室における最初の出遭い。康良煜は、その出遭いがわが生涯に驚くほど大きな影響を及ぼすことになるとはもとより知るよしがなかった。

その落ち着いた物腰に明るい表情を浮かべて教員たちの前に頭を下げて挨拶する少年が、朝鮮を知るべく幼いわが身をかえりみず、鴨緑江を渡り、一人であの遠くも険しい千里の道を歩いてきたという校監の説明に驚嘆した彼は立ち上がり、何学年を志望しているのですかと聞いた。

校監は、中国の4年制小学校を終えたそうだが、どの学年に入れたら良かろうかとしてちょっと考え、とにかく試験をしてみて決めるのが良いだろうと言った。

康良煜は少年をかたわらに呼び、姓名と生年月日、小学校で勉強した模様について記録された成績簿を見た。そこには全学年にわたりすべての課目が最優等で、品行も最上の模範であると評価されていた。

そこで彼は当校の4年生用の『朝鮮語読本』と、ついで漢字混じりの『朝鮮語読本（5巻）』を出して読ませたが、そのどちらもすらすらと読んだ。今度は5年生用の算数の教科書にある計算問題を出したが、それも別に深く考えもしないで、簡単に解い





た。少年の実力の素晴らしさにすべての教員が感嘆してやまなかった。

少年にすっかり好感を覚えた康良煜は、どの面から見ても優秀なこの少年は自分のクラスに入れなければとして、校監に自分が担当している5学年に入れようと言った。

このようにして、金日成主席は彰徳学校の5学年に編入され、康良煜は主席の担任教師になった。

金日成主席は回顧録『世紀とともに』で「わたしは希望どおり康良煜先生が受け持つ学級に編入された」と振り返っている。

20数年前の忘れがたい出来事を追憶する康良煜の興奮は、どうにも静まらなかった。

後になって知ったことではあるが、主席が祖国に凱旋して招いた人たちの一人がこの彰徳学校在学当時の担任教師康良煜だったという。

誰であれ幼少年時代の思い出は忘れがたいものである。いわんや祖国を知り、祖国の息づかいを感じるべく千里の道も遠しとせず故郷に帰った主席にとって、彰徳学校と康良煜先生の思い出は、心の奥深くに強く宿っていたことであろう。

だからこそ主席は凱旋演説を終えた後、演壇を降りると康良煜のことを尋ねたのである。

知り合いの人たちを通し彼の居所を確かめて家族の安否を問い、今彼が成川に出向いていると聞いて、主席は早く会いたいものだと言った。この言葉を伝え聞いて康良煜の長男が大急ぎで駆けつけてきたのである。

康良煜は、平壌市歓迎大会後、将軍に一日も早く会いたいと思いながらも、それはわがままにはならないとして、復興会に参加すべく成川に向かったのである。

それに10代にして朝鮮の独立がならずんば二度と再び帰らぬとの固い決意を抱いて鴨緑江を渡り、祖国の解放を果たして凱旋した将軍とは異なり、自分はその前に胸を張って立つに足る何事をもなしていないという慙愧の念が先立っていたのである。

彼はわが子の伝言を聞くと、直ちに平壌に向かうことを決心した。

彼の心は既に将軍のいる平壌に至っていたのである。

10月18日、感激と興奮に高鳴る気持ちを抑えて金日成将軍の執務する建物の庭に足を踏み入れた時、そこにすらりとした人が立っていた。

「康先生、わたしをお忘れでないでしょうか。彰徳学校でお教えを受けた成柱（ソンジュ）です」

明るい顔立ち、笑顔を見せるときにできる頬のえくぼ……。その容貌は、彰徳学校在学当時、校内の人気を集めていた少年金成柱そのままであった。

「将軍！」

康良煜は胸がつまり、あとの言葉を続けなかった。

主席は彼の前へ進み寄り、力強く抱擁した。その胸に抱かれて激情に駆られた彼は、挨拶の言葉もろくに述べられなかった。

主席は恩師の手を強く取り、「実に久しぶりです。先生はあまりお変わりになっていません。さあ、中へ入りましょう」と言って、執務室へ招じ入れた。

彼に椅子を勧めてから主席は、このようにお会いできて感激に絶えません、健康はいかがでしょうか、と聞いた。

体に別条はないという答えにうなずいた主席は、家族の安否を問い、さらに彰徳学校時代の教師や同窓生たちについても尋ねた。そして、自分が七谷を後にしてからこれまで思い出に最も深く残っているお方は康先生です、今も先生が歴史の時間に愛国名将の話をしてくださったことが忘れられません、それに先生は彰徳学校と大平学校のスポーツ対抗競技を実に素晴らしく指導なされました、先生が体育の時間を楽しく指導してくださったので、子供たちはみんな体育の時間が早く来るのをいつも待ったものですと、深い感慨をこめて当時を振り返った。





朝鮮を知るべく中国の八道溝から千里の道を歩いて万景台に帰った主席にとって、彰徳学校はなつかしくも思い出の深い学校であった。当校における生活は、日本帝国主義植民地支配下で呻吟する祖国と民族の姿を脳裏に深く刻んだ実に忘れがたい日々であった。

康良煜が当時のことを今も忘れずに覚えておられるのですか、と聞くと主席は、自分は山で戦っていた時、日本帝国主義の暴圧に苦しむ祖国のことを考え、祖国のことを考える時はいつも彰徳学校の時のことを思い浮かべたものです、本当に彰徳学校での生活は忘れられませんと言ってから、その間先生はどのようにすごしてこられたのですかと尋ねた。

康良煜は、その後すぐ平壌神学校に入って勉強し、卒業後これまでずっと教会で牧師を務めているとありのままに話して、こう続けた。

「将軍が国を取り戻すために山で苦しい戦いを続けておられた時、わたくしは教会で安穏として日を送りました。まことに面目次第もありません」

主席は、そんなことをおっしゃるものではありません、先生がキリスト教に帰依されたのは日本帝国主義を憎悪するあまりの行為であったと思います、日本帝国主義がわが人民を過酷に弾圧し、わが人民は日本帝国主義に抗して不断に闘争を繰り広げまし

たが、正しい独立の道を見出せず、闘争は失敗し続けておびただしい血を流しました、そうした中で神に国の運命を救ってもらおうとして祈りを捧げたことが罪になるとは言えません、そのような人たちは愛国心のある良心的な信徒だと言えます、と語った。そして、金亨稷先生が江東郡明新学校で子供たちの教育を行いながら反日闘争を展開し、日本の警察に逮捕された時、古邑面東三里一帯のキリスト教徒たちが集い、日本の侵略者の滅亡と先生の釈放を望んで1カ月以上も真剣に祈ったものだと話した。

主席は、各階層の広範な愛国勢力を網羅する祖国光復会には非常に多くの宗教信者が参加したし、その中には日本帝国主義と戦って犠牲になった人たちも少なくないとし、その一例として天道教咸鏡南道道正であった朴寅鎮について話した。

朴寅鎮道正は宗教を信じていながらも、傘下の若い天道教徒を教育して朝鮮人民革命軍に入隊させもするなど遊撃隊への物心両面にわたる援助を惜しまなかった。彼は日本の警察に逮捕され悪どい拷問を受けながらも最後まで屈せずにたたかい、愛国的志操を曲げなかった。

彼の最期を悼みしばらく黙然としていた主席はやがて口を開き、朴寅鎮の闘争業績は歴史に長く残るだろうと言った。

主席は康良煜に、先生がキリスト教を信じたのを問題にすべきことは何もありません、解放なった祖国での今後の先生の新しい生活こそより重要ですと強調した。

ついで主席は当面の国の状況について説明して、こう続けた。

――われわれは一日も早く解放された祖国の地に富強な新しい民主朝鮮を建設しなければなりません。新しい民主朝鮮の建設は、ある一つの党派や個人の力だけではなされません。財産や知識の有無、党派や宗教の所属に関わりなく建国事業に取り





組もうとするすべての人たちが固く結集する時にのみ実現しうるのです。

こう言った主席は、それで、先日わたしは凱旋演説をした際、力のある人は力を出し、知識のある人は知識を出し、金のある人は金を出して建国事業に貢献しようと呼びかけましたと話した。

政見と信教、財産の有無に関わりなく、心から国と民族の富強繁栄を望む人ならば、それが誰であれ、自主独立国家建設の道で共に手を取って進もうという主席の大いなる度量と抱擁力を前にして康良煜は、ただただ感嘆するばかりであった。

主席は彼に、先生は知識があり、牧師として教徒たちの中で高い人望があるのですから、多くのことをなし得ます、わが国にはキリスト教の信者が少なくありませんが、彼らを結集して建国事業に尽くせることが重要です、解放なった今日のわが国で愛国者は、新しい民主朝鮮をつくる建国事業に積極的に参加する人たちです、ですから、宗教者たちすべてが人民と手を取り合って新しい祖国の建設に積極的に参加すべきですと強調し、先生はキリスト教の信者たちが心から国と民族のために尽くすよう努力すべきです、今後しばしば会って相談し、力を合わせて働きましょうと言った。

康良煜は一介の教職者にすぎない自分にかくも大きな信頼を寄せてくださる金日成将軍に頭の下がる思いがし、「有り難うございます。わたくしに対する将軍の信頼をわれわれクリスチャンたちが愛国のひとすじ道を最期まで歩くようお望みになっておられる志と受け止めて、微力ながら全力を傾けます」と誓った。

1945年10月18日。この日は、康良煜にとって、運命的な日、新しい人生の出発を意味する人生の春の日であった。

# 愛国の道へ導き

朝鮮の解放後、我も我も革命家、独立運動家を称し、彼らの主張するあれこれの主義や言動は人々の頭を混乱させた。連日の如く開かれる講演会、集会、懇談会、露天大会などで、ブルジョア共和国だのプロレタリア独裁政権だの何だのという熱弁が吐かれていた。一夜のうちに人民統一戦線とか白衣青年団、キリスト教女性連合会とか労働者評議会というものが現れてビラを貼り、プラカードを振り、ちらしを配る有様である。

このような状況の中で、康良煜は、曹晩植の民主党に関与した。国の解放後愛国者に衣替えして、企業家、商人、クリスチャンなどを糾合していた曹晩植は、キリスト教会の有力な牧師康良煜に巧みに働きかけたのであった。

解放前、烏山学校の校長を務め、朝鮮日報社の社長でもあった曹晩植は大いに憂国をうんぬんしていたが、独立運動家たちが獄死し、あるいは不具の身になって出獄していることに驚いて、非暴力無抵抗主義なる合法的な「愛国闘争」を標榜するえせ愛国者に堕落していたのである。

少なからぬ人たちから愛国の先覚者と見なされていた安昌浩の人格革新論と自我修養論、教育と産業の振興により国権を回復すべきだとする実力培養論を、愛国者の体面を立てながらも危険が身に及ばず安心して暮らせる二つとない最善の方策であると見なした曹晩植は、3・1人民蜂起が無残に鎮圧された後、一部民族主義者が「わが生活はわが物で！」というスローガンを掲げて物産奨励運動を繰り広げると、その指導者然として立ち回った。





しかし、かかる形式的な憂国は、卑怯な内心を包み隠すベールにこそなれ、愛国とは縁が遠い。曹晩植は日本帝国主義の暴圧がさらに強まると、愛国者を標榜していた見掛け倒しの良心まで振り捨ててしまった。彼は、朝鮮という肉塊は既に日本の胃の中に収まっている、それを今になってどう引き出せるのか、大勢は既に決して久しいとして、日本帝国主義の唱える「内鮮一体」「同祖同根」に相槌を打ち、それだけでは足りず、学徒兵志願制や徴兵制を諸手を上げて支持する演説を行い、書も発表して、あらわに親日の道に走った。

金日成主席は曹晩植のそのような過去を知らぬわけではなかったが、彼がおのれの過ちを反省し、国づくりに積極的に貢献することを期待して、しばしば彼に会い、民主主義自主独立国家の建設に向けて、国と民族を愛し、民主を志向する各階層すべての愛国的人民を民主主義民族統一戦線の旗の下に結集しようと説いた。

ところが彼はこれとは裏腹に、ブルジョア共和国を志向して、民主党を共産党と対抗する政党につくろうと目論んだ。

康良煜は曹晩植の過去をある程度知ってはいたが、おのれの思想的な未熟性と、ひいては自分と同じキリスト教の教職者であるということもあって、彼の危険な胸のうちを見透かせないでいた。

日本が敗亡し、国は解放されたが、当時わが国の情勢は複雑をきわめていた。

米国にそそのかされた反動勢力は、わが国の至る所で騒擾を起こし、デマを流して民心を惑わせ、わが人民の民主独立国家建設を何としても妨げようと狂奔していた。

他方、愛国者、指導者の仮面をつけて地方政権機関にもぐりこんだ不純分子は、人民政権の威信を傷つけ、大衆を政権機関に背を向けさせようとさまざまに策動していた。

このような状況の中で曹晩植は、表面では共産党を支持しているかのように見せかけながら、陰険にも一部目覚めていない信者や民族主義者を引きつけるべく処々に遊興の場をしつらえては、自分の過去の功労なるものを宣伝し、共産党を誹謗していた。

1945年10月27日、康良煜は二度目に金日成主席に会った。

この時主席は、われわれがこれまであえて曹晩植の過去を問わず、共に手を取って進もうとたびたび勧めたのは彼の正体を知らずに何か大きな期待をかけたからではなく、一人でも多くの人たちを正しい道に踏み入るようにするためだったとして、クリスチャンたちの覚醒を促さなければならないと話した。

主席は続けて、極少数の人たちを除くすべての信者を覚醒させて民主主義民族統一戦線の旗の下に結集しなければならない、今一部のクリスチャンは反共崇米思想が濃厚な上、曹晩植の甘言に載せられて、われわれの行っていることをあまり歓迎していない、もちろん彼らの中にはわれわれに敵対している人たちも幾らかいるにはいようが、絶対多数の信者は訳も知らずに同調しているに違いないと指摘した。

康良煜は主席の言葉にうなずいた。

「そうです。今一部の信者は、共産主義者が宗教に顔をそむけているために教徒を弾圧するだろうと思い込んでいるのです」

主席は彼に、われわれは信教の自由を拘束も排斥もしないし、宗教者を政治的にも社会的にも差別しない、このようなわれわれの立場は今後とも変わることはない、と言った。

しばらく口をつぐんでいた主席は、話を続けた。

わが国にはキリスト教の信者が少なくない。なかでも平壌に最も多い。だから進歩的で有力な長老や牧師たちと語り合い、信者たちにも働きかけて、民主朝鮮の建設をめざすわれわれの活動がいかに正しいかをはっきり理解させるべきである。先生は信者たちの人望を得ているのだから、彼らとの接触も容易だろうし、彼らも先生の言葉なら喜んで聞き、たやすく納得もするだろう。われわれがこのように積極的に働きかけるならば、大勢の信者を目覚めさせることができ、クリスチャンのみならず、資産家階級に属する人たちにも良い影響が及ぶだろう。また曹晩植を愛国の道へ導く努力も怠らず、粘り強く続けてみると良いだろう。……





康良煜は、たとえ以前は誤った道を歩んだ人ではあっても、なんとかしてあくまでも愛国の道へ引き入れようとする主席の大きな度量と抱擁力に今一度深い感動を覚えた。

彼は、有力な長老や牧師、信者たちはもとより、各階層の人たちを相手にして説得と宣伝を積極的に行った。こうして民主党の影響下にあった各階層の人たちや絶対多数のクリスチャンが共産党を新しい目で見、曹晩植に対する誤った幻想を振り捨てるようになった。

キリスト教信者たちのこうした思想的変化は、その後、民主主義民族統一戦線を形成する上に重要な作用を及ぼした。

康良煜は当時、日と共にアメリカ帝国主義に強く追従していく曹晩植一派の策動で、民主党が愛国に背き、民主に無縁の党に転落し、堕落しつつあるとしてひどく憂慮し、曹晩植に民主主義民族統一戦線への参加を強く勧めたが、一向に効き目がなかった。

民主に顔を背け、愛国に背を向けるやからに同調するわけにはいかないとして、彼は決然として曹晩植とたもとを分かった。

その後、曹晩植一派の奸計に気づいた絶対多数の民主党員は、熱誠者会議を開いて曹晩植を除名し、新たな中央委員会を構成した。こうして民主党は、民主主義を文字通り志向する党に生まれ変わった。

そうした中で1946年1月29日、すべての民主的政党及び団体は、統一的民主主義臨時政府を樹立するという共同声明を発表した。
このことは、民主主義民族統一戦線の旗の下に、各階層の広範な愛国的民主勢力が結集し、新しい国づくりに向けた民主的なすべての政党・団体の統一団結と密接な協力関係が形成されたことを示すものであった。
康良煜は以上のような推移を振り返り、しみじみと考えた。
（曹晩植もクリスチャンだし、自分もクリスチャンだ。同じ信者でありながらも、自分は愛国の道に入り、曹晩植は愛国の道をあくまでもこばみ、最後まで売国の道を歩んだ。
愛国と売国！
斬新な民族愛へ導く偉人の慈しみ深い手に触れられたがゆえに、自分の人生は真の愛国の道を歩んでいるのではなかろうか）

## 悲しみに打ち勝たせた力

冬は遠のき、1946年の春が訪れていた。大同江上を漂流する氷片も一日一日と減り、音もなく溶けるそれら氷片の下から、岸辺に垂れる柳の枝に吹いた芽から春のきざしが胎動した。国の解放後初の春を迎える人たちの胸は、未来への夢と希望に充ち満ちていた。
とはいえ、この年の春は夢と希望、朗らかな笑い声ばかりを載せてきていたのではなかった。
春は約束の季節だと言われているが、数え切れないほどの汗と涙、苦痛なしには、それらを乗り越える献身的な努力の約束





なしには、いかなることも期待できないということを、この新年の春を迎える人たちは理解していた。また、この年の春は、愛国と売国間の深刻な闘争の春でもあるということを実際に理解した。……
当時、アメリカ帝国主義とそれを後ろ盾にした韓国の反動勢力は、わが人民の民主主義自主独立国家の建設を破綻させるべく、卑劣にも新しい国づくりに乗り出した愛国人士を目標とするテロを悪辣に強行し始めた。その第一の目標は金日成主席であった。
1946年3月1日、平壌駅前広場で開催された3・1人民蜂起27周年平安南道慶祝大会の際、デモの参加者たちが土地改革の実施を求めるプラカードや旗を掲げ、スローガンを叫びながら金日成主席が立っている幹部壇の前を行進していた時、突然1個の手榴弾が幹部壇に投げ込まれて破裂する出来事があったが、これはテロのなまなましい実例である。
この出来事を知った康良煜は憤激し、胸の動悸が収まらず、その夜は一睡もできなかった。
（カインは弟アベルを殺して主の怒りを買ったが、すべてのはらからが仰ぎ敬慕してやまない民族の領袖に対して許すまじき悪逆無道の行為を働いた悪者どもに主はどうして罰をお加えにならないのだろうか。そんなやからがこの地にのさばっているとは。……
なにとぞ朝鮮民族の命の綱にも等しいそのお方をお守りになってください）
翌日、彼は金日成主席に呼ばれた。執務室のドアを開けて中へ入ると、主席は立ち上がって歩み寄り、席を勧めた。
しばらく黙然としていた主席は、きのうの3・1人民蜂起27周年慶祝大会で起きた出来事について話し、今反動勢力の策動はこのように悪辣をきわめていると言った。

主席は重々しい口ぶりで、われわれはいつにも増して警戒心を高めなければならないとし、わたしはこの前先生のお宅を伺った際、家の位置と周囲の環境を見て、なんとなく不安を覚えました、それで安全な場所に住宅を1軒求めておきましたから、早速そこへ引っ越すことですと勧めた。このように主席は、わが身よりも彼ら幹部たちの安全を気づかっていたのである。

康良煜の家庭を訪問した主席は、その案内で住宅の内外を見て回り、家の造りはどうか、温突の熱の通しは良いかと確かめもし、住宅の環境にも気を配った。訪問を終えて帰る主席の胸には、何とも形状しがたい不安がつきまとっていた。

さして高くない台地に立つ教会のかたわらにあるこじんまりした家、一般の民家から遠く離れてぽつんと寂しげに立っている恩師の住居がまぶたに浮かんで消えず、どうにも気持ちが収まらなかった。

反動勢力の策動が日と共に悪辣さを増している今、いかなる出来事がどう突発するか予測し得ない。とりわけ反動分子が「赤の牧師」と指弾している今、彼にいかなる変事がいつ生じるか誰が予断できようか。

こう気に病んだ主席は一幹部に、康良煜先生の家庭を訪問してみたが、いくら考えても家の位置が思わしくない、先生に安全な場所へ転宅するようにと勧めたが、元来無欲な方なので、自ら進んでそうはなされないだろうから、市内中心部の安全な場所に住宅を1軒求めて勧めてみるようにしようと言った。数日後、位置が適切で安全な場所に1軒の家を見つけたとの報告を受けた主席は、ささいな不便も覚えないように家の修理をきちんとしておくようにと手配した。

こうした上で主席は、3月2日、康良煜を呼んだのである。





平々凡々たる一介の宗教者にすぎない自分のような人間の安全を気づかい、これほども深い配慮をめぐらしてくださる主席の温情に感動して、康良煜は言った。

「将軍！　わたくしの身辺まで気づかってくださり、なんと感謝してよいか分かりません。どうか、あまりお気にかけないでください。いかに反動のやからとはいえ、ただの宗教者にすぎないわたしのような者まで襲いはしましょうか」

主席はそんな彼に対し、われわれは先生が日本官憲のむごい弾圧の下でも愛国の志を曲げることなく民族的良心をお守りになられたがゆえに先生を尊敬してこうしているだけでなく、反動のやからがやみくもに狂奔しているのを見ると、今にどんなことを仕出かすか分からないので、前もって安全対策を講じているのですといった。そして、先生は国の重要な幹部です、新しい住居を一度ご覧になり、お気に召したら早速転宅なさることです、転宅されたら一度お伺いしますから、ためらいなくお引越しになってくださいと、強く言った。

このように言われながらも康良煜は、反動の一味がいかにあくどくても、まさか宗教者の自分にまで手出しするだろうかと気を許して、転宅を一日一日と延ばしていた。

ところが、あにはからんや、そのことが取り返しのつかない大きな災禍を招くことになるとは。……

3月半ばのある日、彼は、教会のことをもって平壌へやって来ていた地方の牧師たちをわが家に迎えて、夜遅くまで語り合った。当時は土地改革法令が公布されて間もない頃だったので、彼らの話題は自ずと土地改革問題に集中されていた。

1946年3月5日に発布した土地改革に関する法令は、わが農民を暴虐な搾取と抑圧の下で苦しめた封建的土地所有関係と搾取制

度を永遠に廃止し、わが土地を持って存分に農事にいそしんでみたいと念じてやまなかった農民の世紀にわたる宿望を叶え、農業生産力を封建的な桎梏から完全に解放し、速やかに発展させることで、全般的民族経済の振興を促す上に重要な意義を持つ法令であった。

人民の真の幸せをはかって政治を進める金日成主席の徳行に魅せられて、自分たちも国づくりに積極的に献身しようとの決心を固めて、彼らは今後の教会活動について討議した。

康良煜は午前零時がかなりすぎてから自分が使っている上の間を客たちに提供し、下の間で家族たちと並んで床に就いた。

それから半時間ほど経った時、不意に室内に耳をつんざくような爆音が響き、ついで銃声がけたたましく鳴った。白煙が部屋一杯にみなぎり、家具が音を立てて床に崩れた。

驚いて飛び起きた康良煜は室内の惨状に息を呑んだ。かたわらに並んで寝ていた長男と長女は血まみれになって息が絶えており、妻は頭に銃弾を受けて傷つき虫の息である。上の間では定州教会の牧師が絶命し、黄州教会の牧師は重傷を負い意識を失っていた。気がついてみると、自分の腕からも血が流れ、床は血にまみれ、あけに染まっている。

（誰の仕業だ。一体誰が……）

信者たちに慈善と愛を説教している身であったが、わが子たちの無残な死を前にし、ついさっきまで国づくりに積極的に取り組もうと熱心に語り合っていた同僚たちが血を流して倒れている惨状を前にして、康良煜は体内の血が逆流する思いを抑えることができなかった。

この時になって彼は、新宅に早く引っ越すようにとし、油断は絶対に禁物だと強調した主席の忠告を思い浮かべ、それに従わ





かったおのれの浅はかな行為を悔んだ。

康良煜の一家と同僚たちがテロに遭ったという報告を受けた主席は、即時彼に家族を安全な住居に移すよう措置を取り、負傷者たちの治療にそつのないよう具体的な指示を与えた。

主席は、胸の痛みを抑え切れず、抗日の女性英雄金正淑女史を伴って不幸に沈んでいる康良煜の家庭を訪問した。

その日は3月18日であった。主席は悲しみをこらえて丁重に挨拶する康良煜に、反動分子のテロで二人のお子さんを失い、胸の痛みはなんと大きいことでしょうかとお悔やみを述べた。そして、先生のご家庭が不幸に見舞われたとの知らせを受けながらも、今日やっと時間を割くことができましたとし、康良煜と夫人の傷の状態について問い、治療をきちんと受けるようにと言って慰めた。

康良煜はうなだれて、金日成将軍と金正淑女史の忠告をないがしろにし、強情を張ったせいでこんな羽目を招き、面目次第もございませんと恥じ入った。

なんとも大切なお子さんたちを亡くされたとして胸を痛め、無言で彼を痛ましげに見やっていた主席はやがて、今解放がなったとはいえ、わが国の内外の情勢は依然として複雑で険悪をきわめています、テロ分子は、新しい民主朝鮮の建設をめざして活躍なさっている康先生を憎み、雑言を浴びせていた末、それにも飽き足らず、今度は卑劣にもお宅に手榴弾を投げ大事なお子さんや先生を訪ねてこられた牧師さんまで殺害しましたと、憤りをこめて言った。そして、このような状態の中でわれわれがどうして一時たりとも警戒心を緩めていてよいものでしょうか、彼らはテロをもってわが人民の闘争気勢をくじき、われわれの前進運動を妨げ、われわれが気力を落としてへたばること

を期待しているのです、狡猾で悪どい彼らはその反動的な目的を果たすためには、殺人であれ、放火であれ、分け隔てなくなんでも平然と行っています、それで早く転居し、歩哨も立てるよう何度も勧めたのでした、と言い、十二分に防げたであろう不祥事を招いてしまったことが残念でならないと慨嘆した。

主席はまた、わが子たちを失ったとしていつまでも嘆き悲しんでいるべきではありません、敵はそうなることを望んでいるのです、今後これ以上にきびしい試練に遭遇することもあり得ます、そんな時にへたばりこんでいてはなりません、そういう時こそ決然と立ち上がらなければならないのですと、力をこめて言った。続けて、われわれが以前山で戦っていた時、生死を共にしようと誓い合った同志たちを少なからず失いました、彼らはみな若い前途有望な人たちでした、そんな時われわれの胸は締め付けられるように痛みました、けれどもわれわれは同志の死を悲しんでへたばりこんだのではなく、悲しみを憎悪に変え、日本帝国主義を打ちのめす戦いに怒れる獅子のように憤然として突入したものですと語った。

主席は康良煜の顔を見つめながら力づけるようにこう言った。

敵がいかに狂気になって襲ってこようとも恐れることはありません。襲いかかるやからには真っ向から立ち向かい、打ちのめさなければなりません。今一部のキリスト教徒が今回の出来事を知って動揺し、おののき恐れているということですが、先生までもがこんなふうにへたばりこんでいて良いものでしょうか。……

悲しみに暮れ、うつうつと日を送っていた康良煜は、この言葉に刺激されて我に返った。

主席は辞去するに際して、彼に拳銃を与えた。

実は事件の数日前、彼の長男が、市内で進歩的人士に対するテ





ロがしばしば起きており、わが家の周辺でもときたま不審な男がうろついていることに気づいて、父親にもしものことがあってはと案じ、どこかで小型の拳銃を手に入れてきた。それを見た母親は目を丸くし、牧師の家に拳銃だなんてとんでもないとして、それを保安署に差し出すのよと言い張ったので、長男はやむなく母親の言い付けに従った。彼の両親は今度の惨事を体験して、自分たちの考え方があまりにも浅はかだったと身に沁みて反省した。

主席はそんな話を伝え聞き、この日、護身用にとして拳銃を用意してきたのである。金正淑女史は康良煜に、拳銃を決して身から離してはなりませんと、気づかわしげに言った。

その後も金日成主席と金正淑女史は、機会があるたびに康良煜に力をつける話をしては、悲しみから少しでも早く立ち直るようにと努めた。

このような心こもる慈愛に包まれて、康良煜は絶えがたい大きな喪失の痛みを覚えながらもいささかもくじけることなく、不屈の気構えでひたすら愛国のひとすじ道を力強く歩んだのであった。

## 消え失せた憂い

当時、一部のクリスチャンは、金日成主席が1946年3月23日に発表した『20カ条政綱』に信教の自由を保障すると闡明されていたにもかかわらず、半信半疑で、今に共産主義者はなんらかの口実を構えて、自分たちを弾圧しないとも限らないという危惧の念を抱いていた。長年日本の悪宣伝に惑わされ、かてて加えて宗教者を白眼視し、宗教を敵視するえせ革命家の言動、それに根強い

崇米思想に災いされて、『20カ条政綱』に銘記された信教の自由に疑問を抱いていたのである。

康良煜は、自分が政権機関の主要な幹部であり、教職者でありながらも、彼らの疑念を晴らすに足る方策を見出せず、一人悶々としていた。

そうした時の1946年5月25日、金日成主席は康良煜を呼んでキリスト教信者たちの問題について意見を交わした。

主席は、わが国にはキリスト教徒が少なくない、それゆえ今後信者たちをいかに遇し、いかに対応すべきかという問題について考えてみようと思うが、どうだろうかと聞いた。

康良煜は自分の思い悩んでいる問題について相談を持ち掛けられたことを喜び、すぐに応じた。

主席は、わが国でキリスト教が特に多く広がっている地域は平安南北道と黄海道であり、平壌はキリスト教の中心地だと言える、それだけに、キリスト教徒たちをいかに遇するかという問題はきわめて重要な位置を占めているとし、ところで彼らは共産主義者は政治をどんなふうにやるのか見てみよう、キリスト教を弾圧しはしまいかとして、われわれに疑いの目を向けているようだと言った。

一部の信者が抱いている疑念をどうしてこうも明確に把握しておられるのだろうかと思って、康良煜は照れくさそうな微笑を浮かべた。

主席は、われわれが完全な自主独立国家をつくり上げるためには、何よりもまず、愛国的で民主的な政党と大衆団体をすべて含む民主主義民族統一戦線を結成することで、各階層の広範な愛国的人民を結集し、全民族の団結を果たさなければならない、新しい民主朝鮮を立ち上げるためには、一般の民衆だけではなく、キ





リスト教徒たちも残らず統一戦線の旗の下に団結させなければならないが、それは十分に可能であると言った。

そして、宗教を信じようが信じまいが、それは各個人の自由である、われわれは信者たちを政治的にも社会的にもなんら差別していないということを、彼らがはっきり認識するようにしなければならない、と強調した。

主席は康良煜の顔を見つめながら、宗教者たちに対する活動で特に留意すべき点は彼らを軽率に遇することなく、忍耐強く、慎重に誠意をもって対応することですと言った。

牧師である彼自身すら考え及ばなかった指摘に感嘆して、康良煜は、主席の一言一言を噛み締めて聞き、宗教に対する真の共産主義者の立場と態度がどのようなものであるかを今更のように実感した。

主席は話を続けた。

宗教者には祖国がなければならない。植民地に生きる信者には事実上信教の自由がなく、自主独立国家に住む信者のみが信教の自由を保障されているということを彼らにはっきり理解させなければならない。こうして彼らが祖国がいかに貴重であるかを悟り、祖国と民族を愛し、外国の侵略勢力を憎悪するようにしなければならない。……

宗教者にも祖国がある！

祖国を奪われたがゆえに、神社の参拝を強要され、宗門の名さえ剥奪されていた植民地時代の苦悩が思い返されて、彼は主席のこの言葉を胸の中で反芻した。

主席の執務室を辞した康良煜は、自分が考えあぐねていた問題がたちどころに氷解して胸がすっきりし、目の前が瞬時に明るくなった思いがした。

その後、康良煜と民族的良心のある牧師や長老は、一般の信者

たちに、この日の主席の言葉の内容を伝えて、彼らを新しい国づくりに積極的に参加するよう励まし、なんら憂えることなく自由に信仰生活を続けるようにと説教した。

そうした中で、共産主義者が政権を握ったら信仰生活を自由に続けられなくなるのではと気に病んでいた信者たちは、それがつまらぬ苦慮であったと思うようになっていった。一部の信者は、共産主義者は正しいことを行っているから、偽善に満ちたブルジョア政治家たちとは異なり、そのすべてを隠さずに公開している、このことを見ても、その宗教政策は偽りでないとして、神に祈りを捧げる場合も、幸せな生活を守ってくれる祖国のつつがない発展を祈祷し、国づくりに愛国の熱情をこめて参加していた。

各地のキリスト教の日曜学校、聖教学校、神学校などが正常に運営され、信者たちの積極的な支援の下に古びた教会堂の改築、増築それに新築もなされた。例えば、平安北道龍川郡では龍岩浦第1教会と中央教会が増築され、また新岩教会、多獅島教会、茂山教会などの新築がなされていたことが、そうした動きの良い例である。

清津で催された復興会は、朝鮮で信教の自由がいかによく守られているかを十分に示している。

1949年7月初め、咸鏡北道清津第1教会は、黄海南道信川教会の牧師を招いて復興会を催すことにした。彼が復興会に招かれて来ていると聞いて、おびただしい信者が清津に詰め掛けた。

ところが予想をはるかに上回る人たちがにわかに清津に押し寄せたので、交通機関が大混雑し、動きが取れないほどになった。すると当該の内務省交通担当部署は、交通秩序を乱すのは許せないとして統制を加え、信者たちが清津に集まるのを制限した。





当時キリスト教徒連盟の責任的地位にあった康良煜は、この問題をいかに収拾すべきかとして苦慮していた。

この報告を受けた主席は、復興会がこのことのために支障を受けてはならないとして、即時適切な対策を講じた。

キリスト教徒連盟中央委員会の委員長に会った主席は、信者たちが無秩序に動いて交通秩序を乱したことは良くなかったとしながらも、だからと言って復興会にまで制限を加えたのは間違った処置だったと話した。そして、内務省の責任幹部を電話で呼び、キリスト教徒たちが交通秩序を乱したのは責められるべきだが、そのことのために信者たちの復興会に横槍を入れたのは許せない、共和国憲法も信教の自由をうたっているのに、法を執行する部署がこんな風に事を処理していたら広範な大衆を失うことになるではないかと叱責した。また、すぐさま清津市内務署長に交通秩序を守る対策を講じるとともに、清津第1教会が催すキリスト教徒の復興会に干渉してはならないと指示せよと言い、今後清津市で起きたような出来事が他の道・市・郡でも生じないとは限らないから、そんなことが二度と起きないよう事前に適切な措置を講じるよう指示した。

こうして、朝鮮キリスト教徒連盟咸鏡北道委員会は清津市で歓迎大会を開き、復興会を催した。

この場で、信川の牧師は、祖国の富強繁栄をめざして積極的に立ち上がろうと熱烈に呼びかけた。

後日、康良煜は当時をたびたび振り返り、深い感動をこめて、金日成主席の細心の配慮があったればこそ、解放後朝鮮では真の信教の自由が保障されたと回顧したものである。

# 2. 国家の重職に就いて





## 人民委員会の初代書記長に

康良煜は生前、年に1度か2度、わが子に、本棚にある『金日成著作集』第2巻を持ってくるようにと言った。金日成主席が1946年2月8日に行った報告を繰り返して読んだものである。

彼は主席の演説を噛みしめて読んでは、その日の歓喜を思い返したものである。

その日は、人民政権の初代書記長に選出された思い出の深い日でもあった。それ以来彼は40年近くもの間、国と民族の富強繁栄をはかって全精力を傾けてきた。

それがゆえに、彼はこの日の感激を忘れようにも忘れられなかったのである。彼はわが生涯における意義深くも幸せな数ある日の中でも、この日のことが特に忘れられず、人生の晩年に至るまで主席の演説を読み返しながら当時のことを振り返ったのである。

衝天の意気に燃えて新しい国づくりに取り組む人民は、解放なった祖国に神聖な人民の政権が立ち上がることを心から望んでやまなかった。長年にわたる日本帝国主義侵略者の悪逆な植民地支配の下で、民族的蔑視と虐待、搾取と圧政に苦しみ、主権を剥奪された民族の不幸と苦悩がいかに大きなものであるかを身に沁みて体験してきた彼らである。

金日成主席はこうした人民の志向に応えるべく、1945年11月、わが国に中央主権機関を打ち立てる方針を提起した。

こうして、その準備としてまず各級地方人民委員会が設立され

た。人民委員会のメンバーはそれぞれの地における人民大会において、人民の手でじかに選出された。

11月19日には、地方政権機関を統一的に指導し、各道間の経済的連携を保つために必要な、過渡的な部門別行政機関である行政10局が組織された。

翌1946年2月5日、臨時人民委員会の樹立に向けて、民主的政党・大衆団体代表及び各道・市・郡人民委員会委員長、行政局の各局長による予備会議が開かれた。

以上の準備に基づき、金日成主席は、1946年2月8日、民主的政党・大衆団体、行政局、人民委員会代表者協議会を開催し、ここでわが国に中央主権機関を設ける必要性及び臨時人民委員会が果たすべき当面の課題について報告した。

報告で主席は、この会議において中央政権を創立することになったが、これはあくまでも臨時の政権であるということを明確にした。

この日、康良煜を書記長に、各階層の民主人士を政見や信教、党派、その出身や経歴を問題にすることなく、主権機関の責任的な地位に任命した。

これらの人たちが主権機関の責任的な地位に任ぜられたのは、主席の実に思慮の深いおもんぱかりがあったればこそである。

主席は、中央政権機関をいかに構成すべきかについて深く考えた。新朝鮮を人民の自由な、繁栄する国につくり上げる重大な課題は、中央政権機関の責任幹部たちの双肩にかかっているからである。

人民のための国を打ち立てるべく、抗日の血戦万里を共に手を取って血を流しながら戦ってきた同志たちの姿が頭にこびりついて離れなかった。だが、今は各階層人民の信頼を勝ち取り、彼ら





を一つに固く結び付けるべき重大な時である。

こうして主席は、たとえ革命家としては未熟であっても、各人の強い民族的良心と愛国心を重視して、彼らを政権の要職に就ける決断を下したのである。

一教会の牧師にすぎない康良煜を中央主権機関の書記長に迎えたことには、国と民族を愛する人ならば、誰であれ手を取って共に歩もうと心がけてきた金日成主席の大きな包容力が示されており、同時に、愛国的良心を抱いている彼がわが国、わが民族に尽くす愛国の道を変わりなく歩み続けるようにしなければとおもんぱかる深い恩愛がそこにこもっていたのである。

康良煜牧師が中央主権機関の初代書記長に就任したと知ったクリスチャンたちは、それをわがことのように喜び、主席の建国路線を支持して立ち上がることを誓い合った。

国づくりの前途にはいろいろな障害が折り重なっていた。なかでも日本帝国主義の悪辣な民族愚昧化政策により、国の解放直後、230万を越える非識字者が存在していたが、これは国づくりにとって無視できない大きな問題であった。人々を政治生活に積極的に参加させ、国づくりに一役買うようにするには、一日も早く非識字者をなくさなければならなかった。

そこで主席は、非識字者の一掃を国づくりの第一次的な重要課題として提起し、全人民を文盲退治へと呼び起こした。

ある日、主席は康良煜に、文盲退治運動を繰り広げるにしても、また勉学に飢えている数百万の子供たちを勉強させるにしても鉛筆がなければならないが、鉛筆の生産が問題となっている、国が日本帝国主義の支配下に置かれていたがために鉛筆工場一つまともなものがないと嘆かわしそうに言った。

康良煜は、一国の領袖が鉛筆のようなこまごました問題にまで

深く思いを致すことに胸を締め付けられる思いがした。

そんなある日、主席は金正淑女史から、手工業的ではあるが、鉛筆を作っている小工場が市内にあるという報告を受けた。

その工場は、後に愛国的企業家として知られることになった宋大官が始めたばかりの工場だった。彼は普通江のほとりに工場を建てて鉛筆を生産していた。

この話を聞いて喜んだ主席は、数日後じかに工場へ出掛けた。そして、まだ欠点があるにしても、わが朝鮮人が初めて作った鉛筆だ、これほどなら成功だと言えるとして満足の意を表した。工場を離れるときには、ことわざにもあるように最初のひとさじで腹が膨れはしない、すぐに国が大きな建物を建て、資材や商品の運送問題を解き、伐採林も提供するから上質の鉛筆を大量に生産し、他の企業も思う存分手がけてみるようにと激励した。

工場を見て帰った主席は康良煜を呼び、今すぐ国営の鉛筆工場を建てることは無理だから、民間の企業で鉛筆の生産を増やすようにすべきだ、普通門の近くに鉛筆工場があるが、積極的に援助するようにと強調した。

その数日後の1946年2月20日に開かれた会議では、主席の提案により、鉛筆の生産問題が最初の議題として上程された。主席は会議で、鉛筆の問題を解決するのは単なる実務上の問題ではなく、新しい世代をりっぱな人材に育てるためのきわめて重要な問題だとして、鉛筆の生産問題解決のための具体的な方向と方途を示した。そしてその翌日、主席は康良煜に、鉛筆工場の建物を立派に立てて与えようと言った。

さらにしばらく経って、当時は容易に手に入れ難い新しいトラックを鉛筆工場に贈った。こうして宋大官の鉛筆工場は生産を急増した。





鉛筆問題の解決を進めていた日々は、康良煜にとって、小さな鉛筆の一本一本に、富強祖国の明日を設計し構想する主席の英知がいかに深くこもっているかを思い知る貴重な日々であった。

金日成主席は康良煜が国家的な眼識を備え、自信をもって活動を進めていくよう導く上にも深い関心を向けた。

土地改革が本格的に進められていたある日、平安南道龍岡郡（当時）の一牧師が康良煜を訪ねてきた。

彼の言うことによると、キリスト教の牧師であることを理由にして、所有しているいくらにもならない果樹園が没収され、住み慣れた土地から居住地を他地へ移される羽目になったとのことである。彼が解放前、暮らしを立てるために、小さい果樹園を買ったことは、康良煜も承知していた。

いくら考えても、彼が土地の没収対象になるわけはないと判断した康良煜は主席に会った。土地没収のいきさつを詳しく聞いた主席は、康先生はこの問題についてどう考えるかと聞いた。

康良煜は、どうも地方の幹部たちが偏向を犯しているようですと答えた。

主席は、この件は一部の幹部が土地改革法令を自分なりに解釈し、誤って執行したのだと指摘し、土地改革の実行過程に部分的に欠陥が生ずることはありうるが、問題はそのような過ちをいちはやく発見し是正することが重要だ、康先生がこの問題を見逃さず直ちに提起したのは本当によかったとして、その牧師に果樹園を返し、居住地を他へ移す決定も取り消すようにということを臨時人民委員会の名で通達書を送ればよかろうと言った。

康良煜は直ちに指示文を下達し、当地幹部たちの偏向をいちはやく正した。こうして当地方の土地改革は過ちを犯すことなく順調に遂行された。

このように主席の温かい配慮に守られて、康良煜は国家建設の経験を一つ一つ積み上げながら、誇りある愛国偉業の道のりを一歩一歩確信に満ちて歩むことができたのであった。

## 安息日の善行

1946年、わが国では土地改革、重要産業の国有化、労働法令、男女平等権法令などの民主改革が成功裏に遂行されて、社会経済制度の植民地ならびに半封建的性格は拭い去られた。

新たに生まれた社会経済関係は、階級関係をも根本的に変化させた。わが国では地主、買弁資本家、親日派、民族反逆者などが一掃されて、勤労人民が国の主人になり、労農同盟が強化された。

民主改革の課題が遂行されるに従い、次の段階の課題の遂行へ移る条件が次第に成熟していった。

こうして、諸会議において、臨時的な性格を帯びている現人民委員会を法的に固められた政権に移行させることが最も現実的で合理的な急務であるとし、社会主義政権の樹立を見据えた民主選挙を実施する方針を打ち出した。

その年の9月初め、各級地方人民委員会委員選挙に関する規定を制定し、11月3日に全ての地域で道・市・郡人民委員会委員選挙を実施するとの決定を採択した。

全人民は、解放後初めて実施される民主的な道・市・郡人民委員会委員選挙を全面的に支持し、その成功をはかって積極的に動いた。

選挙日が切迫するにつれて、内外の敵対勢力は選挙の破綻を狙





い、さまざまに卑劣な手段をもって妨害活動を繰り広げた。

キリスト教会の教職者たちの中に、頭にこびりついている誤った先入観のせいで彼らに惑わされ同調する動きが現れた。

投票日が10日ほど先に迫った10月24日、朝鮮イエズス教長老会西北路会連合会議が開かれて、キリスト教徒の選挙不参加が決議された。

その理由として、政教分離の原則を守るには宗教者は政治に参与することが許されない、絶対に安息をすべき聖日曜日には礼拝以外のいかな行事にも参加することはできない、だから日曜日に投票をしろとキリスト教徒に強要するなら、それは信教の自由を許さぬ弾圧行為になるとし、教徒は投票に参加してはならないと力説した。もしかかる条件を無視して人民政権がどうしても選挙に参加せよと強要するならば、当日午前零時に教会の鐘を一斉に鳴らすから、その時刻に選挙場の、候補に反対する黒色の投票箱に票を入れろと信者たちに暗々裏に説教した。

その日、こうした事実を知った康良煜は、投票日が間近に迫っている今、早く適切な対策を講じないと、長老会の決定が選挙によからぬ影響を及ぼすことになると憂慮した。それですぐ長老会の人たちに会い、解放後に行われる初の歴史的な選挙だから、信者たちもみな参加すべきではないかと口をきわめて説いたが、一向に効き目がなかった。

いらいらした彼は、この事態を主席に報告して教えを仰ごうとし、翌25日、金日成主席に会った。

朝鮮イエズス教長老会西北路会連合会議が11月3日に行われる民主選挙への不参加を決定した裏には、反動分子たちの妨害策動がひそんでいると見られる、とした主席は、この動きを強く警戒し、徹底的な対策を立てるべきだとして、彼らがいかなる理由で選挙への不参加を決定したのかと尋ねた。

康良煜は彼らの言う不参加の理由をありのままに話した。
主席は、投票日がキリスト教の安息日だとしてそういう決定を行ったとのことだが、キリスト教は安息日にはどんなこともしてはならないとしているのかと聞いた。
康良煜は、聖書には安息日にも善い行いはすべきだと書かれており、教会では日曜日に牧師や長老の選挙もなされていると説明した。
主席は大きくうなずき、日曜日だから投票に参加できないというのは、ただわれわれに反対するために考え出した口実にすぎないはずだと、厳しい口調で言った。
康良煜は悪者どもが人民政権に敵対すべくキリスト教徒たちの中に魔手を伸ばして悪辣に策動していると初めて気づいた。
主席は慎重な面持ちで、連合会議に参加した牧師たちはみな投票への参加に反対したのだろうかと質問した。
「いや、何人かの牧師が先頭になって立ち回ったためにそうなったようです」
主席は、キリスト教の内部に宗教の仮面をかぶって、われわれの選挙を妨害しようと躍起になっている者たちがいるようだから、警戒心を高めなければならないと強調した。
静まり返った執務室内に、晩秋の冷え冷えとした風に落ち葉が散る音が時々聞こえた。そんな音を聞きながら康良煜は、安息日を理由にして信者たちの選挙参加を妨げようと企む一部の教職者たちが、あたかもその季節を生き終えて消えてなくなるあの落ち葉となんら変わらない存在のように思えた。
しばらく考えに沈んでいた主席は、連合会議の中心人物たちの傾向について質問し、自分がそれらの牧師や市内の有力な牧師たちに会ってみたらと思うが、どうだろうかと言った。
康良煜はほっと胸をなでおろし、喜びにあふれて答えた。





「そうして頂ければ、ほかに何を望むことがありましょうか」
主席は、では早速会うことにしましょう、先生も同席なさってくださいと言った。
主席はその日の午後、長老教会とメソジスト教会の牧師10数名を招いた。
彼らを執務室に迎え入れた主席は、彼ら一人ひとりの手を温かく取り、にこやかに挨拶して、座を勧めた。
一同が席に着くのを待って、主席は淡々とした口調で話を始めた。
国の解放はなりましたが、わが国にはまだ真正な人民の政権は樹立されていません。われわれが立てようとする人民民主主義政権は労働者や農民だけでなく、知識人、民族資本家、宗教者など各階層すべての人たちがみな参加する真正な人民政権です。
こう切り出した主席は、みなさんは今回行われる選挙についてどうお考えになっておられるのでしょうかと聞いた。
しばらく押し黙っていた牧師たちの一人が立ち上がり、選挙は国を治める代表を選ぶ重要な善いことですと答えた。
主席は、それは正しいお言葉です、ところが聞くところによりますと、わが国で初めて行われる今回の選挙の日が日曜日だとして、信者たちに投票に参加してはならないと指示したということですが、本当でしょうかと聞いた。
室内にしばらく沈黙が流れた。
いつまでも黙っていることがはばかれて、今一人の牧師が立ち上がり、選挙は善いことに違いはありませんが、投票日が安息日なので、そうせざるを得ませんでしたと答えた。
これに対して主席は、聖書には善行は安息日でも行えると書かれているではありませんかと反問し、そんな例を挙げて話した。
主席が聖書の内容について話すと、牧師たちは驚いて顔を見合

わせた。主席がそんなにも聖書の内容に詳しいとは思いもよらなかったのである。

主席は微笑して、民主選挙が有用な善いことだと認めておられるならば、人民の代表を選ぶ選挙に、信者の参加を妨げる理由は成り立たないはずです、教会でも安息日に長老や執事を選挙する例があるではありませんかと言った。

主席の理路整然とした指摘に、牧師たちは返す言葉がなかった。

主席は、敵対勢力がわが民族の団結を何よりも恐れているためにわれわれの民主選挙を破綻させるべく、キリスト教の教理をねじ曲げて利用しようと企んでいるにもかかわらず、あなたがたが悪者どもの奸計に乗せられて、祖国と民族を裏切る道に入ってもよいのでしょうかと説いた。

続けて主席は、祖国と人民のために尽くすことを禁止する宗教などはあるはずがありません、祖国と人民のために働くこと以上に大きな誉れと矜持がどこにありましょうか、宗教者たちもわが祖国と人民を愛しているはずです、人民委員会の選挙が祖国と人民のためのすぐれた行為であるからには、キリスト教徒が日曜日に善行を行うことを認められている以上、選挙への参加を禁ずる理由は成り立たないではありませんかと、じゅんじゅんと説いた。

牧師たちは自責の念に駆られてうなだれた。

そんな彼らを見回して主席は、祖国と民族の興亡は全人民の手にかかっている、朝鮮人であるならば、祖国の富強発展と民族の繁栄をめざして尽力する義務がある、宗教者も祖国があればこそ信教の自由が保たれる、それゆえ宗教の指導者たちも当然自分たちの祖国のために働かなければならないはずだと力をこめて言った。

この熱烈な愛国の真情で貫かれた主席の説得に、頑迷な偏見に





凝り固まっている牧師たちの理性が呼び覚まされて、愛国の熱い血が体中に流れるような思いに彼らは駆られた。

一人の牧師が立ち上がり、自分たちが悪者どもの奸計に惑わされて重大な過ちを犯してしまいました、なんとお詫びを申し上げたらよいか分かりませんと謝罪し、これまでの過ちを正して、金日成将軍のおっしゃった通り、すべての信者を民主選挙へ参加させるよう努力致しますと誓った。他の牧師や長老たちも口を揃えて、自分たちも同じ心情だと語った。

この日、彼らは金日成主席に別れを告げ、軽い足取りで帰った。

主席はそんな彼らを喜んで送り帰したが、心の一隅には、たとえ一人の宗教者でも悪者の巧言につられて国と民族に背を向け、わが人生の道に禍根を残すようなことがあってはと気づかった。

康良煜はこの日の感動を噛みしめながら安州、博川、定州、宣川、新義州などの地を巡りながら、地方に住む信者たちに金日成主席の高邁な志を伝え、すべての信者が一人残らず民主選挙に参加するよう熱心に説いた。

一方、主席にじかに会って話を聞き、自分たちの過ちを悟り気を取り直した牧師たちも、信者たちに、朝鮮イエズス教長老会西北路会連合会議の決定は誤りだったと伝え、信者たちはこぞって選挙に進んで参加するようにと説教した。

遂に、11月3日、歴史的な初の民主選挙の日が来た。

夜明けと共に選挙宣伝隊が鼓を打ち、ラッパを鳴らして町や村を行進し、投票所の前庭にはいずこを問わずにぎやかな踊りの輪が繰り広げられた。

選挙場に向かう人たちの群れの中には、安息日に善行をする喜びを抱いて道を急ぐキリスト教信者たちの姿もあった。

全国、全人民が大きな感激と喜びにひたっている時、金日成

主席は平壌市第6号選挙区第52号分区にて労働者身分の候補者に賛成投票を行った。

わが国で最初に実施された道・市・郡人民委員会委員選挙は成功裏に進められた。

選挙の結果、94名の宗教者が道・市・郡人民委員会委員に当選し、さらに朝鮮民主主義人民共和国の建国に際して行われた最高人民会議代議員選挙では、宗教者14名が当選している。

以上見てきたように、宗教者たちも真正な自分たちの祖国を持っているがゆえに、信仰生活の自由と並んで国の政治に参与する政治的自由も享有しているのである。

## 人民の真正な働き手に

康良煜は、繁栄する富強な国を作る偉業に微力ながらわが力と知恵を尽くそうと念じながらも、国づくりの知識に乏しいことが残念でならなかった。

解放なった朝鮮で人民の国を立て運営するのは、歴史の草分けの道だと言えた。そんなわけで、康良煜をはじめとする幹部たちは活動を何からどう始めるべきかについて右顧左眄した。

この歴史の草分けの道の陣頭に立って幹部たちを人民主権機関の力強い働き手に鍛えていったのは、金日成主席であった。

1948年の初め、1947年度人民経済計画を総括し、1948年度人民経済計画を法として確定する問題が持ち上がった。

1947年度人民経済計画は、わが国で初めて実施した人民経済計画であった。康良煜以下幹部たちは、今何をなすべきか五里霧中で、手をこまぬいていた。





そうした状態に気づいた主席は、1948年1月24日に康良煜を呼び、1947年度人民経済計画の実行総括と1948年度人民経済計画を討議する予定だが、会議の準備を急がなければならない、会議ではまた、1948年度の総合予算を審議し、政令を承認し、朝鮮臨時憲法を全人民の討議に付する問題なども上程することを予定していると語った。

康良煜は、主席の話を聞いて、最高主権機関が当面なすべき課題が何であるかをはっきり悟り、確信を持って任務に取り組もうとの意欲に燃えた。

事務室に戻った彼は、当該幹部を集めて主席の意向を伝えた上で、会議に関する具体的な手配も行った。自分たちがどのような任務を果たすべきかを知った幹部たちは、与えられた課題に積極的に取り組んだ。

こうして1948年2月6日と7日の2日間行われた会議は、上程されたすべての議案を真摯に討議し、会議を順調に締めくくることができた。

それだけではない。

朝鮮民主主義人民共和国の創建に伴い制定された共和国憲法には、最高人民会議常任委員会は代議員との活動を行うと明記されていた。

最高人民会議常任委員会の委員たちは、その意味について真剣に話し合った。

最高人民会議常任委員会が代議員との活動を行うとはどういう風にすることなのか、最高人民会議代議員はどんなことをすべきなのか。……

彼らは活発に話し合った。けれどもそれらはいずれも聞き慣れない問題だったので、議論は空回りに終わり、結論が得られなかった。

この時も最高人民会議常任委員会書記長の任に就いていた康良煜は、この点について主席の正確な説明を聞くほかないと考えて、最高人民会議第1回会議後のある日、主席に会った。

彼が主席の執務室を訪れると、主席は明るい微笑を浮かべてその手を取り、実はわたしも書記長に一度会いたいと思っていたとして喜んだ。

康良煜は、最高人民会議第1回会議後に進めた常任委員会の活動状況を報告し、その中で起きている問題点についても話した。

彼の話を注意深く聞いた主席は、ちょっと考えてから、代議員は誰であれ一定の職業についていなければならないし、人民の忠僕にふさわしく、活動と生活のすべての面で手本を示さなければならない、人民が選んだ人民主権機関の代議員は、人民の頭上に君臨して人民を押さえつけ支配する官僚輩などではない、彼らは人民のために働く人民の忠僕である、だから代議員には人民と全く同じような一定の職業がなければならない、そうなれば常に人民と一緒に働き、彼らの中で生活して大衆の声を聞き、その最も正確な意思を主権機関にいち早く反映して正しい政治が行われるようにすることができると強調した。

康良煜は主席のこの指摘を噛みしめ、人民政権の真の人民的性格とはどのようなものでなければならないかを深く思い返し、代議員たちが人民のために真実に働くようにするために、常任委員会が彼らとの活動に大きな力を入れるようにしなければと決心した。

共和国の創建は、人民の無限の力と情熱を一挙に爆発させた。

かつて自分たちの国を失い、植民地奴隷の境遇を宿命として甘んじざるを得なかった人たちは、今こそ自分たちは尊厳ある共和国の堂々たる公民だという自負、誇りを抱いて工場や農漁村の





いずこを問わず、革新と飛躍をめざして奮闘していた。

主席は新しい国家表彰制の制定を発意して、1948年10月初め、最高人民会議常任委員会の幹部たちに会い、新たに実施する国家表彰制として国旗勲章を定めなければならないとして、常任委員会のなすべき当面の課題について具体的に教えた。

康良煜は直ちに関係幹部たちと協力して、国旗勲章に関する規定をつくり、勲章の図案を定めるなど国家表彰制の制定に力を傾けた。

こうして10月12日、政令により国旗勲章第1級、第2級、第3級が制定され、ついで12月21日、抗日武装闘争に参加して戦いに献身し、また祖国の防衛と人民の利益を守る上で抜きん出た勲功を立てた数十名の人たちを叙勲するとの政令が採択された。

このニュースは新聞やラジオで一斉に流され、新聞には写真を添えて、彼らの挙げた勲功の内容が詳細に紹介された。

最高人民会議常任委員会は、わが国で最初に行われる叙勲式を盛大に進めることを決定し、その準備に奔走した。

翌1949年1月8日、わが国で最初の叙勲式が盛大に執り行われた。

康良煜はこの歴史的な儀式の瞬間瞬間、いかに大きな感動に包まれたかについて、後日、この日の思い出をしばしば語ったものである。

この日、金日成主席は満面に明るい笑みを浮かべて叙勲式に臨席した。

叙勲式ではまず、最高人民会議常任委員会康良煜書記長が開会の辞を述べ、抗日武装闘争時期英雄的に戦った抗日革命闘士たちと祖国の防衛と人民の利益を守る上で大きな勲功を立てた人民軍ならびに内務省の将校たちに国旗勲章を叙勲するとの政令を伝えた。

## 2．国家の重職に就いて

続いて国旗勲章第1級から始めて第2級、第3級の国旗勲章の叙勲がなされた。

金日成主席は、歴史的な叙勲式の終了後、受勲者たちと共に記念写真を撮った。

主席はその後もたびたび国家叙勲式に臨席して、受勲者たちが国家・民族の富強繁栄をはかり、より一層大きな偉勲に輝くよう励ました。

康良煜はこのように金日成主席の細心の指導の下、主権機関の重要な働き手としての知恵と能力を不断に高めていったのである。



# 3. 戦火の日々に

# 温情こもる配慮

1950年6月25日、人々がまだ深い眠りから覚めていなかった早暁、アメリカ帝国主義は共和国を急襲した。朝鮮人民軍はこれを阻止して直ちに反撃を開始し、ここに祖国解放戦争の火蓋は切って落とされた。

この3年間の朝鮮戦争を振り返るたびに、康良煜は、連日止むことなく空襲する米空軍の爆撃を受けて無辜の人民が無残に殺された情景を語り、米軍の蛮行を指弾したものである。

米空軍は朝鮮の一切の物を抹殺すべく狂い立った。

米軍は開戦初期、590余の航空機を用意し、これなら72時間内に戦争を締めくくれると豪語した。ところが、朝鮮人民軍の破竹の進撃に度肝を抜かれた米軍は空軍を急増した。開戦1カ月後の7月には、極東空軍の機数を890機、さらにその2カ月後の9月には1200機に増やした。米空軍は、前線と後方の別なく連日空襲した。

朝鮮の一詩人が怒りをぶちまけたように、米軍の野蛮な爆撃で雀までもが消えて失くなった朝鮮の全土は火の海に変わり、家庭という家庭はほとんどが傷ついた。

1950年8月31日、この日の空襲で教会の建物さえもが幾棟も破壊され、その付近の民家では人命の被害もあったと聞いて、康良煜は憤然として立ち上がり、部屋の中を行ったり来たりした。

この時、電話のベルが鳴った。金日成主席からだった。

主席は、今回の空襲はかなり激しかったが、牧師の中に被害はなかったかと尋ねた。

「将軍、負傷者はいません。けれども、この爆撃で教会堂がかなり破壊されました。教会堂が破壊されるのを悲しみ、牧師たちはアメリカに対する幻想から覚めているようです」

主席は、アメリカ帝国主義者はその侵略野望を果たすべく、自分たちを「神の使徒」だと称し、口ぐせのように唱えていた「ヒューマニズム」の仮面もかなぐり捨てて、朝鮮人民を悲惨な戦乱のちまたに追い入れたということを信者たちにはっきり認識させ、同時に自分たちの遠謀でキリスト教を布教すべく建てた教会堂まで爆撃している実例をもって彼らの覚醒を促すべきだと強調し、ほかにも米軍の鬼畜の如き野蛮な爆撃で、解放後わが人民の血と汗をもってつくり上げた貴重な財宝が形態すら見分けがつかぬほど破壊され、大勢の人たちが犠牲になっていることを強調し、アメリカ帝国主義者はわれわれの友でなく不倶戴天の敵であることをはっきり認識させることだと話した。そして、牧師や長老たちが空襲の被害を受けないよう十分に対策を立てることだとして、教会堂の多くが高台にあるために空襲の被害がそれだけ大きくなろうから、教会堂の近くに防空壕を掘り、早く退避できるようにすることだと言った。

そのすぐ後、キリスト教徒連盟は、米空軍の無差別爆撃で大勢の人たちが死に、あまつさえ教会堂まで破壊されていることを詳細な資料を添えて信者たちに知らせた。康良煜は、教会堂の近くに防空壕を設け、牧師や長老たちが被害を受けないようにすべく積極的な対策を立てた。

ところで、一部の信者は神の加護を絶対視し、空襲警報が鳴ると、防空壕ではなく、教会堂に集まった。アメリカ人は神の福音を伝える使徒であり、慈善家、ヒューマニストであるから、教会堂を爆撃するようなことはしないと信じていたのである。

しかし、それははかない盲信にすぎず、それがゆえに痛ましい災害に見舞われる結果を招いた。その一つの実例は、米空軍の新義州大爆撃である。

この国境都市に飛来した米空軍爆撃機は数万発もの焼夷弾と爆弾を投下して全市を爆破・炎上させ、罪のない市民を無残に殺傷した。

この日は日曜日で、市内の諸教会には大勢のキリスト教徒が集まり、安息礼拝を行っていた。

空襲警報が鳴っても教会に爆撃を加えることはなかろうと安心して礼拝を続けている信者たちの信頼を裏切り、爆弾や焼夷弾を投下し、火炎の中から主の加護を祈りながら飛び出す信者たちに向けて戦闘機は機銃射撃を加えた。こうして新義州第1教会と第2教会では、数百名もの信者が無残に殺された。この時の死人の中からは、十字架の前にひざまずいて祈っていた姿勢そのままで焼死した長老とその子の遺骸も発見されたという。

米空軍の猛爆撃が止むことなく続いていた10月初めのある早朝、金日成主席はまた康良煜に電話を掛けた。

電話のベルの音に目を覚まされて彼はすぐに受話器を取った。主席は、今米空軍の爆撃はますます激しくなっている、こんな状態で高台にある教会の建物は敵機の爆撃の格好の目標になるだろうから、牧師たちを安全な場所へ退避させなければならないと言った。

康良煜は、遅滞することなく牧師たちの退避措置を講じた。感激した牧師たちは、彼の手を取って感謝の言葉を述べた。

「これまでわたくしたちのことをこんなにも深く思い、気にかけてくださった方がどこにいたでしょうか。まこと金日成将軍こそわたしたちの救世主です」

キリスト教徒に対する主席の深い思いやりはこれにとどまらなかった。

戦略的な一時的後退を余儀なくされた状況を前にして、康良煜は心の動揺を覚えざるを得なかった。それまで大きな試練などはほとんど経験したことのない彼は、この重大な事態に遭遇して、





何から先にどう処置すべきか戸惑った。

そうした時、彼は電話で主席の指示を受けた。

主席は、彼の錯雑とした心情に思いを致しているかのように、沈着な、平常と変わりのない口調で、牧師たちを伴い慈江道の江界へ退避するようにと言った。

この措置は、宗教者たちに対する主席の一貫した信頼の表示であり、彼らが愛国の道を変わりなく歩むようにとして下した愛の命令であった。

この愛と信頼はそのままに力となり、勇気になって、彼は幾人もの牧師を伴い、折り重なる困難を乗り越えて、全員を無事に目的地まで避難させた。それ以来牧師たちは、礼拝のたびに主席の無事とその指揮の下にわが国が勝利するようにと祈ることが欠かせぬ日課になったという。

米侵略軍が大いに意気込み喧伝して開始したクリスマス総攻勢が、朝鮮人民軍の総反撃により、これは「米軍の史上最大の失敗」だったという悲鳴に変わり、一時占領していた地域から完全に駆逐されて間もない1951年1月のある日のことである。

疎開地を後にして平壌に向かっていた最高人民会議常任委員会の幹部たちは、平壌市の郊外で、主席の側近の一人に会い、彼から常任委員会が当分の間位置する地が決められているとし、そのことについての感激的な話を聞いた。

平壌へ先に帰って最高司令部の位置を定めた日の翌早朝、幹部たちを呼んだ主席は、眺めていた地図から目を離し、最高人民会議常任委員会の位置を現地へ出掛けて決めることにしよう、地図の上の標識を見ただけでは心が置けないと言った。一同は驚かずにいられなかった。

疎開地から帰る常任委員会の位置は、主席がしばらく前に具体的に検討した上で定められていたのである。

最高人民会議常任委員会の位置のことについてそんなにも気を使う主席に感動しながらも、幹部たちは、そのお気持ちは分からぬわけではありませんが、それでも今は最高司令部からまず活動条件を整えるべきではありませんかと言った。

主席は、みなさんの主張は十分に理解できるが、最高人民会議常任委員会の人たちはほとんどが老体だから、彼らがいささかの不便も覚えず、一日も早く任務に着手できるようにするためには、わが目でじかに現地の状況を確かめ、適切な処置を取る必要がある、最高司令部は位置を定めて任務に着手しているのだから、最高人民会議常任委員会も満浦から帰り次第一定の場に位置を定めてすぐ活動を始めうるようにすべきだ、そうするためには現地をわが目で確認しなければならない、早く出掛けようと言った。

一同が主席に従って外へ出た時はまだ夜が明けておらず、あたりは薄暗かった。

一行の車が山裾の曲がりくねった雪の道を走り、峠を越えて、いくつかの谷を横に見ながら走っていた途中のある谷の入り口で、主席は車を止めて降り、しばらくあたりを見回して、この谷の中へ車を入れよう、地図で見ておいた谷はここだと言った。

車が谷の奥に至ると、主席は外へ出て、谷の地形に目を凝らした。

北側を東西に走る山脈と、そこから南方へ向けて伸びた二つの支脈に挟まれて谷はできているが、東側の支脈が途中西側に曲がり、谷の入り口をほとんど塞いでしまっているので、この谷の中に入ると、あたかもくりぬき鉢の中にいるような思いにとらわれるのである。

谷を作っている山の傾斜は南側を除いていずれもかなり急で、そこにはクヌギ、クリ、松が生い茂っており、夏期には青空も見えないだろうと思えた。

主席は、この谷の形は妙をきわめている、谷が傾斜の急な高い





山に囲まれている上、樹木が密生していて、敵機は目標の発見をほとんどできないはずだと満足し、もしこの谷を発見して爆撃を加えようとすれば低空飛行をするほかない、けれどもそんなことをしたらあれらの山肌にぶつかってこっぱみじんになると、周りの山を指しながら豪快に笑った。

東の空に差し昇った朝日が谷間を明るく照らし始めた。

朝日を仰ぎながら主席は、常任委員会が満浦からここへやって来て位置を占めたらきっと満足するだろうとして喜び、始終にこにこしていた。

やがて主席は山際のところどころに立っている住居に目を向けた。どの家も造りの大きい、スレート葺きの古くからの家だった。それらの庭には、戦前の住人の幸せな生活を垣間見せているかのように、ナツメの木、ユスラウメの木、アンズの木などの果樹が植わっていた。けれどもそこに人の気配はなく、障子紙が破れ、柴垣が倒れたりしているのを見ると、いずれも主人たちのいない空き家に間違いなかった。

それらの家を見て歩いた主席は、最高人民会議常任委員会の人たちが帰ったら、当分の間これらの家に落ち着くようにしようと言った。

それらの家をすべて見終わった主席は、これらの家は主人たちが帰ってくればすぐに返してやらなければならないから、早く事務所の建設を終え、万が一の敵機の空襲に備えて、事務所の横の山腹に坑道も掘らなければならないと言い、その位置を自ら定めた。

こうして、激戦の続く厳しい戦時のさなかにも、康良煜をはじめ常任委員会の幹部たちは主席の細心の配慮と温情に守られて、なんらの不自由も覚えず、任務を遂行していった。

1952年に入ると、米軍は乱暴にも国際法を無視して細菌兵器と化学兵器を公然と使用し、都市と農村にそれまで以上の大爆撃を

加えるなど、朝鮮人民の抹殺をはかって狂い立った。

1952年8月5日、金日成主席はいよいよ悪辣になる米軍の爆撃に備えて最高人民会議常任委員会も防空壕を掘り、そこで執務をすべきだと指示し、防空壕をどう掘るべきかについても教えた。

当時、常任委員会には敵機の機銃射撃を防げる程度の防空壕はあったが、主席は、防空壕を一層堅固に大きくつくり、そこに委員長と副委員長、書記長用の執務室はそれぞれ別に設けるべきだとし、防空壕の建設労力と資材は別途に手配すると言った。

防空壕はその秋に完成して、最高人民会議常任委員会は、映画の観覧室まで備えたこのゆったりした防空壕内で、戦時の危険の中でも落ち着いて各自の任務を遂行していけるようになった。

彼らは、常時違えることなく常任委員会を定期的に開き、すべての力を戦争の勝利に向けることに集中し動員することに主眼を置いて委員会の活動を展開し、立法や国家表彰など随時に持ち上がる課題も手落ちなく果たしていった。

康良煜は、毎年正月元旦を迎えるたびに、新年を祝うささやかな宴会で、主席と同じテーブルに着き、一切の気苦労を忘れて楽しいひとときをすごした戦時中のあの忘れえぬ日々を大きな興奮に駆られて追憶していた。

1952年と1953年の元旦、金日成主席は、最高人民会議常任委員会の幹部と祖国戦線議長団のメンバーをはじめ国の幹部たちを招いて宴を催し、人民軍将兵と全朝鮮人民を祝賀した。

人民からの祝賀の挨拶を受ける前に、人民にお祝いの言葉を述べる主席を仰いで、宴会の参加者たちは目を潤ませた。

主席のこのような格別な配慮と厚い温情があったればこそ、康良煜はもとより、最高人民会議常任委員会の幹部たちは、戦争の厳しい試練に打ち克ち、人民政権を一段と強く固めて、戦争の勝利に寄与し得たのであった。





# 勝利の信念を抱かせて

朝鮮人民は祖国解放戦争の全期間いささかも揺れることなく、必勝の信念を抱いて戦ったが、この信念の源泉は偉大な領袖金日成将軍に対する不動の信頼であった。

周知のように、戦争は鉄と鉄、火と火の対決であり、同時に、思想と信念、意志の対決でもある。

アメリカ帝国主義は朝鮮戦争に200余万の大兵力とおびただしい航空機、戦車、砲、軍艦をつぎ込み、それでも足りず原爆の投下をうんぬんさえした。一方建国間もない共和国の武力はあまりにも貧弱であった。勝敗は誰の目にも厳然としているかに見えた。ところがその予断は完全に覆されたのである。

戦争たけなわの1952年7月27日の昼時、金日成主席は康良煜の家庭を訪れた。

康良煜と夫人はそれと知って外へ駆け出した。車を降りた主席を迎えて夫人が真っ先に挨拶した。

「全国の人民が頼りにしている将軍が、その大切なお体の危険もかえりみられずどうしてこんな所へお出でなされたのです。わたくしどものことをこれほどに思ってくださって何とお礼を申し上げてよいか分かりません」

満面に明るい笑みをたたえ、家族一同の挨拶を受けた主席は一人ひとりの手を温かく取った。

久しぶりに主席に会うことができて夫人は感激に震え、胸を熱くし、目に涙をにじませた。

康良煜は、ぶしつけにもほどがあると夫人をたしなめ、主席を部屋へ招じ入れた。

厳しい戦争を指導し、いっときとして休むいとまのない金日成将軍をわが家に迎えて、そこに骨肉の如き情を覚えた夫人は、胸をわくわくさせ、食事の支度に余念がなかった。

主席は康良煜と静かに談話を交わした。

戦争たけなわの当時、康良煜の一家は戦略的な一時的後退から平壌に帰り、主席の配慮である山の深い谷間の日当たりがよく、空襲にも安全な場所に建てられた壁の厚い家に住んでいた。

ここで最高人民会議常任委員会書記長の任に当たっていた康良煜にとって気がかりなことが一つあったが、それは、深い谷間に閉じこもって仕事をしているので、世情とりわけ戦況にうとくなることだった。

彼は数日に一度まとめて持ち込まれる新聞を読むだけでは気持ちが納まらず、時にはすぐにも最高司令部へ出掛けて主席に会い、情勢の推移についての話を聞きたい思いに駆られては、時間に追われている主席に迷惑を掛けてはとして思いとどまったりもしていた。

そんな彼が、この日、思いもよらず主席の訪問を受けたのである。

彼は家庭の生活と常任委員会の活動状況を報告した後、停戦会談の成り行きと、戦争の今後の見通しについて話していただきたいと願った。

主席は彼の質問に快く応じ、今、軍事・政治情勢はわれわれに有利に傾いている、敵は技術的優勢に頼り、「強大性」を誇示しながら、この戦争を有利に締めくくろうと躍起になっているが、わが党と共和国政府の回りに固く結束した人民と人民軍の団結した力を前にして恥ずべき敗北のみを繰り返している、この戦争のさなかで人民軍はたぐいなく強化され、銃後も強固になった。他方敵は相次ぐ軍事的・政治的惨敗を挽回できず窮状にあえいでいるとして、わが軍の戦果を具体的に語った。





主席の話を熱心に聞いた康良煜は、ほかにも知りたかったことが多かったので、次々に質問した。

「今敵は無差別爆撃を強行し、細菌弾まで投下していますが、何か成算があってのことでしょうか」

「今後アメリカ帝国主義者は、停戦会談でどんな態度を取るでしょうか」

……

主席は彼の質問のどれにも明白な説明を行った。

アメリカ帝国主義はこの2年間の戦いで、第2次世界大戦で蒙った損害をずっと上回る損害を受けてたじろいでいる。今彼らには、休戦かそれともこれまで通り前線における対峙状態をそのまま維持すべきか、あるいは戦争を拡大して第3次大戦のような大戦に突入すべきかという三つの選択肢がありうる。しかし、アメリカには第3次大戦のような大戦を行えるだけの準備はできていない。それゆえ彼らには休戦協定に調印する以外に他の道がない。にもかかわらずなぜ休戦をずるずる延ばしているのか。彼らにはいわゆる「栄誉ある休戦」を行って「勝利者」に見せかけることに重要な目的があるのだ。けれどもそうはいかないだろう。われわれはこの戦いに敗れたアメリカ帝国主義を勝利者などとは認めないであろう。……

このように当時の政治情勢と前線の状況を語った主席は、祖国解放戦争におけるわが人民の勝利は確実であり、われわれは必ずや最後の勝利を遂げずにはおかないだろうと、確信に満ちて言った。

主席のこの自信ある言葉に力づけられた康良煜は、戦略的な一時的後退の時の出来事を思い浮かべた。

康良煜の一行が後退して落ち着いた慈江道満浦のある谷間には、最高人民会議常任委員会のメンバーがいた。

晩秋の冷たい風に落ち葉が吹き上げられていた1950年11月19日、金日成主席はここを訪れた。

この厳しい戦況にあって、人跡稀な山あいの地に主席が自分たちを訪ねてくるなどとは夢にも思わなかった康良煜その他の幹部たちは驚き、喜んだ。

主席は、こんな深い山の谷間ですごすことになり、ずいぶん不便な思いをしていることでしょうと慰労して、常任委員会が臨時に利用している家の庭に入った。

彼らは主席を迎え入れるに足る清潔な家のないことに胸を痛めた。

主席はそうした彼らの気持ちをいたわるように、自分たちはパルチザン闘争を行っていた時、このような家に厄介になって休んだこともあるとして抗日武装闘争時代を回顧し、部屋が暖かくてよいと言って喜び、彼らの活動や生活状況について尋ねた。

慣れない後退の道で苦労した彼らのやつれた顔、任務の遂行がままにならず、気分のすぐれぬ彼らを思いやり、しばらく口をつぐんでいた主席はやがて、好転した戦況について詳しく語り、勝利の確信を抱くべきだとみんなを力づけ、勇気を奮い立たせた。

今や前線の状態はわが方に決定的に有利になった。困難な一時的後退の試練を克服してわが軍は再進撃の途についた。今敵軍は完全に守勢に陥り、南へ退却しつつある。平壌の解放は間近い。わが軍はすぐにも共和国の全域を完全に解放するだろう。……

主席の確信に満ちた言葉にみんなは顔を輝かせた。勝利を確信し、歓喜にどよめく一同を見回して、平壌の解放がなればわれわれは直ちに平壌へ帰らなければならない、だから常任委員会は平壌へ帰る準備を急ぐことだ、みなさんばかりでなく、中央機関はみな平壌へ帰らなければならないと言った。

その日の感激を振り返っていた康良煜に向かって、主席は話題を変え、常任委員会がこれからなすべき任務について語った。

先生は今常任委員会書記長の任に当たっていますが、常任委





員会はその任務をそつなく果たさなければなりません。ここではまず戦時功労者の国家表彰を考えるべきです。この問題では事務所に閉じこもって推薦状をただ検討するだけでなく、功労者のいる現場にじかに赴いて事実を詳しく確認することが重要です。また、戦時の状況に即して国家の法秩序を正すことにも力を入れることです。みなさんは最高主権機関の働き手にふさわしく戦闘的な生活気風をもって働かなければなりません。……

主席は、康良煜が担当しているキリスト教徒連盟の活動についても言及した。

先生はキリスト教徒連盟を指導する重任も負っているのですから、キリスト教徒たちを共和国政府の周りに固く結集することに大きな力を入れなければなりません。彼らをそのように導くにはいろいろと障害があり、困難もひとかたならぬものがありましょうが、なんとしても彼らをよく教え導いて一つに結集することです。われわれは、良心的な、国を愛する信者たち、わが共和国政府の政策を支持する信者たちとは変わりなく統一戦線を張り、力を合わせるべく努力しているのです。キリスト教徒たちを教え導く上で何よりも重要なことは、彼らの頭にこびりついている崇米・恐米思想をきれいに拭い去り、民族自主精神に徹するようにすることです。信者たちは神に祈る場合も、わが国、わが人民の幸せを祈るようにならなければなりません。……

厳しい戦争の中で、キリスト教徒たちも家を失って四散し、教会のほとんどが爆撃で破壊されるという状況にあって、その頃キリスト教徒連盟の活動は生彩を欠いていた。

康良煜は主席の指摘に目を覚まされたような思いがして、きっとそう致します、有難うございます、本当に有難うございますと、心から感謝の言葉を述べた。

そのうちに時間がかなり流れ、康良煜夫人が昼食の膳を整えて

部屋へ上がってきた。
　膳には山菜のあえものと賽の目切りの大根キムチ、それに冷麺の器が載せられてあった。
　この簡素にすぎる膳を主席の前へ置く夫人も、それを見る康良煜も面目なく、身の縮む思いに駆られた。
　主席はそんな二人に、どうしたのです、麺は昔から朝鮮人民に喜ばれているわが国に固有の民族食品です、とりわけ平壌冷麺は世に聞こえた美味な食べ物です、古くからわが国には開城のソルロンタン（牛の頭やもつなどを煮た吸い物）と神仙炉（山海の珍味を一つの鍋に円く並べて煮た料理）など地方それぞれの誇る料理があるが、平壌では大同江のボラ汁と冷麺が殊に有名ではありませんか、と言った。そして、自分たちが山で戦っていた時も、そば粉や小麦粉が手に入ると、冷麺を作って食べたものですと、抗日武装闘争当時のことを振り返った。
　主席は、団欒たる家庭的雰囲気に包まれて康良煜とその家族たちと談笑し、一家の暮らしにも深い思いを致して、その家を辞した。
　康良煜は、主席がどうしてこの山間のわが家へわざわざ時間を割いて訪れてくださったのかをはっきり理解していた。
　情勢が険しくなる時ほど勝利の確信を抱き、国と民族のために尽くすべく踏み出した愛国の道を最後まで歩むよう力づけ、勇気を奮い起こすようにと、いにしえの担任を訪ねてきたということを。……
　そのちょうど1年後の、勝利の祝砲と花火が打ち上げられた日、康良煜は1年前のその日のことを振り返り、胸中でしみじみと主席に祝福の言葉を述べた。
　「わたくしどもは、ちょうど1年前のあの日、今日のこの日を見ました。われわれは勝利しました」



# 4. 愛国の道を最後まで

## 祖国を離れた信仰生活は有り得ない

苛烈をきわめた祖国解放戦争は、わが人民の勝利に終わった。戦場の砲声は止んだが、国の情勢は依然として緊張し、戦後復興建設の前途には想像も及ばぬほどの無数の困難と試練が折り重なっていた。

すべてが破壊され、炎上し、全土が灰じんに帰した。これほど凄惨な災害を残した例は、世界の戦史に見出すことができない。アメリカ帝国主義者は、朝鮮は100年経っても再起できないだろうとうそぶき、外国の友人たちも朝鮮の無残な被災状況を目撃して、果たして朝鮮は今後どうなるのだろうかと憂えたものである。

わが人民の生活は困難をきわめ、食糧にも衣料にも事欠いた。復興建設もさることながら、この衣食住の欠乏が問題だった。

しかし金日成主席は、党があり、人民政権があり、人民があり、領土がある以上、戦争の被害がいかに大きく、事情がいかに困難であっても、十分に新しい生活を生み出せると確信し、全人民を戦後の復興建設へと力強く呼び起こした。

主席はその指導に忙殺されながらも、康良煜の公務と生活に変わりのない関心を寄せ、温かい配慮をめぐらした。

戦火が収まって20日ほど経った8月中旬の蒸し暑いある日、主席は康良煜の家庭を訪れた。

復興建設の指導に忙殺されている主席の思いがけない訪問を受けて驚き、康良煜夫妻は履物もまともに履けぬまま庭へ駆け降りた。





夫妻に丁重に迎え入れられた主席は、二人と向かい合って床に座った。

康良煜は主席に、われわれは戦いに勝利したのですから、最高人民会議常任委員会の建物を早く建てる必要がありますと言った。

主席はこれに対して、先生のおっしゃった通り、委員会の建物は建てなければなりません、しかし何事であれ順序というものがあります、復興建設も同じことです、と言い、首をかしげる康良煜の気持ちを察して微笑し、こう続けた。

機関や公共団体の建物の建設は少々先に延ばしても、戦争の苦しみに打ち克ったわが人民の住居から先に建てなければなりません。

主席は続けて、アメリカ帝国主義者は、戦争で見る影もなく破壊された平壌市は100年経っても二度と立ち上がれないと豪語しています、それでわたしは、わが人民は戦争で侵略軍を撃ち破ったが、戦後の復興建設でも朝鮮人の気骨を見せてやろうと決心したのですと話した。

康良煜は、あ、なるほどとうなずいた。

金日成主席が何故に、戦勝閲兵式を済ませると、その足で江南れんが工場へ向かったのか、また、重工業を優先的に発展させながら同時に軽工業と農業を発展させるという独創的な経済建設路線を打ち出したのかを。……

けれどもその時は、分かったということと会得したということの間にははっきりとした違いがあり、さらに会得するということと実践するということの間には一段と大きな違いがあるということには気づいていなかった。

1954年1月24日のこと。康良煜は数日前からちょっとした寒気

がし、体がぞくぞくしていた末、熱を出して寝込んでしまった。欠勤した2日目の朝、一晩中熱に浮かされて呻き声をもらしていたが、風邪薬を飲んで汗を出すと熱が少し下がったので元気付き、起き直っていた時だった。外で車の止まる音がし、ついで妻が部屋の戸を開けて金日成将軍のお出でですよと伝えた。

康良煜は驚いて立ち上がり、迎えに出ようとしたが、主席は早くも敷居をまたいで部屋へ入ってきた。

「お邪魔します」

康良煜は主席の突然の訪問に戸惑い、挨拶の言葉すらろくに述べられなかった。

主席はそんな彼の手を取って床へ座らせ、先生が病気だと聞いてお伺いしましたと、気づかわしげに言った。

康良煜はこれくらいの病気のためにわざわざ見舞いを受けたことに恐縮し、喜びよりも申し訳ないことになったと、そわそわした。

「国事に多忙をきわめておられる将軍に心配をお掛けしてしまい、本当に申し訳ございません」

主席はとんでもないことをおっしゃるとし、「で、お体はいかがですか」と聞いた。

「将軍、薬を飲んで汗をかいたので、風邪は消えてなくなったようです。ですから、もうご心配には及びません」

主席はそういう彼のまだいくぶん充血している目を見て、風邪を軽く見るのはよくありません、まだ熱が残っているようですから気をつけなければなりません、われわれはもう戦争に勝ったのですから、心おきなくゆっくり治療すべきです、体が丈夫でないと仕事の成績も落ちます、と言って、彼を力づけた。

その温情あふれる言葉に胸が熱くなり、康良煜はハンカチで





目じりを押さえた。

主席は話題を変えた。

われわれは本年度から、戦争で破壊された人民経済を立て直し、零落した人民の生活を向上させるための戦後人民経済復興発展3カ年計画の遂行に取り掛かります。戦後人民経済復興発展3カ年計画は、実に膨大で生易しいものではありません。しかしわれわれはこの課題を何としても必ず遂行しなければなりません。そうしたら、100年かかっても二度と再び立ち上がれないと喧伝しているアメリカ帝国主義者のたわごとを一蹴し、朝鮮人の底力を今一度誇示できるのです。

そのためには、去る祖国解放戦争の時と同様、全人民が一丸となって立ち上がらなければなりません。われわれは以前もそうであったように、今後も人民の力を固く信じなければなりません。わが人民が立ち上がれば不可能なことはありません。

こう力をこめて言った主席は続けて、この場合クリスチャンだからとして例外におくことはできない、だからキリスト教徒連盟は全信者を戦後人民経済復興発展3カ年計画の遂行へふるって参加するよう力強く呼びかけなければならないと強調した。

康良煜は主席の言葉に大きくうなずき、祖国がなければ信仰生活もまっとうにできない、国なき民は喪家の犬にも劣る、祖国を失った宗教者に誰が信教の自由を保障してくれようかと思い、戦時のある日のことを思い浮かべた。

1951年の暮れも押し詰まった12月28日、金日成主席はキリスト教徒連盟の活動問題を討議すべく、内閣庁舎に康良煜を呼んだ。

ここで主席は、われわれは戦争の最後の勝利を早めるために、前線の支援を一層強化し、銃後をさらに固め、祖国戦線の強化に引き続き力を入れ、全人民を朝鮮労働党と共和国政府の周りに強

力に結集し、すべてを祖国解放戦争の勝利をめざす戦いに従わせなければならないと強調した。

康良煜はその話を聞いて、キリスト教徒連盟を指導する任に当たっている自分がわが責務を全うし得ないでいることに気づいた。

主席は、彼の深刻になる表情をちらっと見やり、語調に力を入れた。

「わが祖国、わが共和国を離れた信仰生活は有り得ません」

主席のこの言葉に、国を亡くしていた時代のみじめな、苦悩に満ちた信仰生活が痛ましく思い出され、この指摘はまぎれもない真理だと彼は覚えた。

祖国の解放前、朝鮮の宗教者たちは、日本帝国主義の支配の下で民族的虐待と蔑視、耐え難い貧困と苦痛をなくしてくださいと神に祈った。しかし、国を奪われていた彼らは、一向にその苦しみから抜け出すことができなかった。

彼自身も当時、日本の官憲から「皇道精神」を信者たちに注入せよ、日本軍の戦勝を祈る祈祷会を行えなどと強要され、はては教会の鐘を戦争の遂行に役立てるために献納せよとまで強要された。

信者たちに安定した生活の場を提供し、民主的に生きる道を開いてくれたのは金日成将軍の20星霜になんなんとする抗日の血戦を通して取り戻された祖国であり、そこに打ち立てられた人民政権であった。

一方、朝鮮戦争が勃発すると、信者たちは、アメリカ帝国主義侵略軍の野蛮な朝鮮人大虐殺をわが目で目撃して、「神の国」を自称するアメリカ人は朝鮮民族の血にまみれた仇敵だったと悟り、その多くが信仰生活を放棄するに至った。信仰心の篤い信者





たちも、戦略的な一時的後退時期、一部のクリスチャンたちが愛国者たちの虐殺に加担したことに驚愕し、それを恥じて戦争の勝利に微力ながら尽くそうとして努力していた。

この日、主席は、信者たちに戦争はわが方が必ず勝つという確信を抱かせ、彼らの信仰生活を正しく導くことに努めるよう強調した。

康良煜は胸中の思いをまとめて、わが決心を語った。

「将軍、今日は重要なお教えを頂きました。国を失っていたあの時代、わたくしども信者の誰がかような心こもる助言を受けたことがありましょうか。今後、将軍の意図を違えることなく、積極的に努力致します」

戦時中に受けたこの日の教示を思い返しながら、単なる理解や会得より実践こそ重要だと自覚した康良煜は主席に、どうか信者たちのことでこれ以上心を煩わさないでくださいと願った。

主席は、今後、参観や見学なども行うようにして教職者たちが祖国の現実をはっきり知り、共和国政府の施策がいかに正しいかを知るようにすることも忘れてはなりませんと言った。

康良煜は、いろいろとお教えを頂いてばりばりと働いてみようという意欲が湧きましたと言った。

主席は、先生が病気だと聞いて心配し、見舞いに参ったのですが、病が快方に向かっており、キリスト教徒連盟の指導に対する意欲を湧かせているようですので、安心しておいとまできますとして喜んだ。

そっと部屋の戸口に座り、主席の言葉に耳を傾けていた康良煜夫人は、あわてて立ち上がった。

「将軍、わが家へお出でになり、そのままお帰りになられてはなりません。もう昼時も近いのですから、お食事をなさってから

お帰りになってください」

主席は、感謝しますと言って、康良煜に向き直り、お体を大切になさるのですと挨拶して腰を上げた。

康良煜が外へ見送りに出ようとするのを押しとどめた主席は、夫人に向かってご主人の看病をよくなさってくださいと言った。

外へ出て、主席の車が遠ざかるのを見送りながら康良煜は、祖国を離れた信仰生活は有り得ないと強調した主席の言葉を長いこと噛みしめていた。

## かつての師に対する信頼

1950年代の中頃、わが国の情勢は錯雑とし、緊張していた。

アメリカ帝国主義者は「熱核戦争」をうんぬんして世界を威嚇し、狂気の反共騒動を繰り広げ、これを怖れた現代修正主義者たちは反帝闘争を放棄して帝国主義と妥協する方向へ進んだ。

韓国では、アメリカ帝国主義の尻押しで、第二の朝鮮戦争を引き起こすべく熱を上げていた。

共和国の内部も穏やかでなかった。

戦争により破壊された経済はかなり立ち直ったとはいえ、未だにその傷跡は処々に残り、人々の生活は楽ではなかった。そうした中でも人民は困苦欠乏に耐え、悪戦苦闘して戦後の復興建設を進め、社会主義建設に取り組んでいた。

こうした内外の緊張した情勢につけこみ、党と国家の要職を占めていた不穏分子が頭をもたげて、その醜い政治的野望を遂げんものと策動した。

1955年12月のある日、金日成主席は、平壌市内の新築なった





住居に移って間もない康良煜の家庭を訪れた。主席は住宅の内外を明るい表情を浮かべて見て回り、たいそう満足して部屋に座った。

ここで康良煜は主席に、彼が以前から気づいていた最高人民会議常任委員会内の穏当ならざる雰囲気について報告した。

当時、常任委員会の責任的な地位を占めていた一部の幹部と追随者たちは、その野望を果たすべく頭をもたげて露骨に策動していた。

彼の報告を慎重な面持ちで聞いた主席は、自分も彼らの不実な挙動については知らぬわけではなかったが、今日先生の話を聞いて、その罪状を具体的に確認できたとし、一部不堅実な者たちが国の解放直後から今日に至るまで党と国家の政策に難癖をつけては、先生を陥れようとしてさまざまに策動しているが、先生はひたすらわが党の路線と政策を支持してきたと言った。

康良煜は、自分を陥れようと企む悪口雑言が絶えなかったさなかにも変わりなく自分に信頼を寄せてたたえてくれる主席にどう感謝を述べてよいか分からなかった。

主席は信頼のこもる目を彼に向け、わたしは先生をどの誰よりも信じ、尊敬していますと言った。

この言葉に、康良煜はふと、1年前にあったことを思い浮かべた。

その時、党と国家の要職を占めていた一部不実な幹部たちがその政治的野望を果たす一端として、主席に忠実な幹部たちを除去すべく陰謀を企んだ。

国の解放以来、主席の深い信頼を得て国と民族に尽くす愛国の道を歩んできた康良煜も、彼らの謀略対象の一人であった。

彼らが康良煜に難癖をつけたのは、この頃が初めてではなかっ

た。解放直後はもとより、祖国解放戦争当時も、自分たちの言いなりにならない康良煜をけむたがり、それとなく圧力を加えていた。

康良煜は心中穏やかでなかった。彼には信を置けないとそしる声が、彼の耳にも入っていたのである。

誰よりもわが国、わが民族を愛する気持ちは大きいと自負している彼ではあったが、誰にその心情を訴えることができようかと一人悩んだ。彼は、主のお救いを静かに待つのがよいと教えている聖書のくだりをそらんじてみもしながら、何か新しい希望が生じるのではと強く期待していたが、心の安らぎは得られなかった。

当時彼がそれにも増して一層苦しんだのは、最高人民会議常任委員会書記長の重職にありながらも、主席を十分に補佐できずにいる自責の念だった。

祖国解放戦争当時、主席が砲爆撃の絶えない最前線の戦士たちに会うべく出掛ける時も、戦後、破壊された工場や農村を視察すべく道ならぬ険しい道を気にもかけずに出発する際も、なんとか思いとどまらせなければといらだちながらも、では誰が主席を代行しうるのかと思うと、あえて反対しようがなかった。

1954年11月初めのある日、康良煜は主席に呼ばれた。呼ばれた理由も分からぬまま、その執務室に入ると、主席は両手を広げて立ち上がり、喜んで席を勧めた。

主席は彼の顔色を眺めて、その心情を推し量った。

深い思いやりをこめて彼を見つめていた主席は、悪者どもが先生をあれこれといわれもなく誹謗しているが、わたしが先生を保証しましたとして、こう言った。

ひとが先生のことをなんと考えようと、わたしは先生を信じます。





わたしが先生を全的に保証したのですから、いかなる者も先生に手出しすることはできません。

主席のこの信頼は、康良煜の苦衷を跡形もなく洗い清めてしまった。

主席はその後もしばしば機会があるたびに、彼に信頼の言葉をかけて、変わりなく愛国の道を歩むよう力づけた。

康良煜はこのように会うたびにいよいよ大きくなる主席の愛と信頼に思いを致し、わが責務をより立派に全うせずにはおかないと心に誓った。……

康良煜の家族たちと楽しいひと時をすごしていた主席は、その家に戦前にあったピアノがないことに気づいて、どうしたのかと尋ねた。

康良煜と家族たちは、主席の思いやりのある質問に一切気おくれするふうもなく、ピアノがなくなった事情を語った。

先の戦争の戦略的な一時的後退に際して、七谷の知り合いの家に預けておいたのだったが、疎開地から帰ってみると、平壌を占領した侵略者にそれを奪われていたというのである。

ピアノを失って誰よりも大きく落胆したのは康良煜の娘で、そのことを思い出しては腹を立て悔しがっていた。この日もなくなったピアノが話題に上がると、彼女は泣き出しそうな表情をして、主席のかたわらにしょんぼりたたずんでいた。

主席はそんな彼女に優しい目を向けて、ピアノがなくなって残念なことになってしまったね、でもちょっとの間我慢するのだよ、そうしてそれよりもっと立派なピアノを手に入れてみようねと言ってなぐさめた。

主席はそれだけでは気持ちが収まらなかったのか、彼女の顔を見つめながら、今すぐピアノは手に入れられないけれど、うちにバイオリンがあるから、それをあげよう、わたしと一緒にうちへ

行こうよと言った。

彼女は大喜びして主席の後に従った。

歳月は流れ、バイオリンの主人も何度か変わった。けれどもそのバイオリンの音は今日もこの地に鳴り響いている。その音は、自分に変わりのない信頼を寄せ、国と民族に尽くす愛国の道でいつまでも変わることなく志を同じくする同志として押し立ててくれる金日成主席をいつまでもたたえる康良煜の賛美のこだまであり、主席に従って最後まで愛国の一路を歩むことを誓う新しい世代たちの不変の信念の発露でもあった。

## 改めて体得した真理

1963年12月中旬のある日、康良煜は金日成主席の邸宅に招かれた。

主席は彼を喜んで迎え入れ、待っていましたとしてその手を取って食卓に着かせた。そして、先生は今日わたしが招待した賓客です、食事を共にしながら話を致しましょうと言った。

主席は出張中、健康に差し障りはありませんでしたかと聞き、今回ポーランドで催された世界平和大会に参加した状況について質問した。

11月28日からポーランドで開かれた世界平和大会に康良煜は、朝鮮民主主義人民共和国代表団団長の資格で参加した。

彼は、本大会が、アメリカ帝国主義者は侵略行為を中止し、朝鮮人民のたたかいを支持する運動を広範に進めようと呼びかける決議を採択するよう積極的に努力したのであったが、主席はその成果を大きくたたえた。

大会の模様を具体的に聞いた主席は、先生は会場で演説を実に立派に行った、アメリカ帝国主義者の侵略的で欺瞞的な正体を明





快に暴露したと評価した。

滅相もない、それは分にすぎたお言葉ですと恥じ入ると、主席は、いや、先生は七谷の彰徳学校時代から論理があり、理路整然とした授業をなされて、生徒たちの人気が高かったじゃありませんか、わたしは山で戦っていた頃、彰徳学校のことを思い出すたびに、いつも先生の姿がまぶたに浮かんだものですと言ってほほえんだ。

主席の称賛に身の縮む思いをしながら康良煜は、大会に参加して覚えた所感を語った。

世界平和大会のような意義ある国際的イベントに参加したのは今回が初めてではなかった。ところで、そのたびに感じることは、世界の多くの国や進歩的な人士たちがわが共和国を積極的に支持していることだった。

主席はこれに対して、今回の平和大会に見られたように、アメリカ帝国主義は世界から孤立し排撃されているとして、数日前に出された外務省スポークスマンの声明をその例として引き合いに出した。

当時最高人民会議常任委員会副委員長の地位にあった康良煜は、国の対外的地位が日々に高まっていく中で、外国へ出張する機会も多くなっていた。

彼が最高人民会議代表団の一人として、1964年4月初めから1カ月余り、東南アジア諸国を訪問し、インドネシアに至った際、スカルノ大統領は代表団を歓迎して、ボゴール宮殿で盛大な宴を催した。

宴たけなわの時、康良煜は大統領に、朝鮮人民とインドネシア人民の友好協力関係がいよいよ深まっていることを祝福して、歌を一曲歌わせて頂きますと言った。

満場の視線を集めて立ち上がった彼は、朝鮮に対するインドネシア

人の理解をより一層深めたいと念じて歌謡『わが祖国』を歌った。
康良煜の歌声が場内に響いた。スカルノ大統領は親指を立てて高く上げ、「金日成、金日成」と繰り返した。
金日成主席は、最高人民会議代表団が帰国した後、康良煜に会い、今後も多くの国を訪れることになろうが、健康に留意することですと言った。
康良煜はそれを自分に対する信頼と心得て、対外活動を精力的に進めた。
1973年5月中旬のある日、康良煜は主席に呼ばれた。
ラテンアメリカのある国で大統領の就任式が行われるが、その就任式に参加する代表団の派遣問題を討議したいということであった。
数日前、わが国を訪問していたその国の代表団団長から、自国の大統領就任式にわが国の代表団を公式に招請すると申し入れられたが、就任式に康良煜副主席を団長とする政府代表団を派遣しようと思っていると言った。
この言葉に康良煜は、その国の代表団が主席の接見を受けていたく興奮していたという話を思い出した。
彼らは、つとにインドの有名な詩人タゴールがうたったように、20世紀の朝鮮がアジアの灯火であるならば、金日成主席はアジアの灯火、いや、世界の灯火、人類の救世主ではないかとして、このような人民の領袖、世界的な偉人は世界に広く知らされなければならない、われわれはまず、自国の人民に金日成主席の不滅の業績と朝鮮についての紹介宣伝を広く行い、朝鮮との友好を強めていくであろうと語った。
この日主席は、老体の康良煜副主席が遠くの外国へ向かうことに不安を覚えているかのような面持ちで、今度の旅程は遠くも初めての道ですから難儀しないとも限りません、骨の折れる旅





でしょうから、お体に気をつけてくださいと言った。
康良煜は、自分のことをこれ程までに深く思ってくださるその人情の世界に胸を熱くした。けれども、それが自分にかけられている温情のすべてではないということをその時はまだ知らなかった。
その二日後のこと。日が沈んで間もないたそがれ時、電話のベルが室内のしじまを破って響いた。
無心に受話器を取った康良煜は驚いた。金正日（キムジョンイル）国防委員長からの電話である。
「お元気ですか。近頃、先生の体にお変わりはありませんか」
喜びに胸をはずませながら、彼は別条ありませんと答えた。
金正日国防委員長は、もう年も取られているのですから健康に留意すべきですとし、代表団の出発が迫っているので、準備ができたかどうか知りたくて電話をしましたと言った。
準備はおおよそできていますという返答を聞きながらも、そのささいな点にまで配慮して、金正日国防委員長は、「わたしは先生がこのたびの任務をスムーズに果たすものと信じています」と言った。そして、その国に共和国の代表部がないことを考慮して、代表団が支障なく任務を果たせるよう具体的な措置を講じ、さらに両国間の時差により起きる環境の急変で体調が崩れる恐れがあるから、くれぐれも体に気をつけるようにと注意した。
指導者が偉大だと、国と民族の対外的地位は日々に高まるという真理を体得していたがゆえに、康良煜は20数日の外国訪問日程を成功裏に終えて帰国し、その後も世界の国々を訪れて、自国の指導者の偉大さと、尊厳ある朝鮮民主主義人民共和国の威容を知らせ広める伝播者の役割を積極的に果たしていったのである。

# 5. 歳月は流れても





## 気高い道義

金日成主席は、固い信頼と熱い同志愛をもって、康良煜が最後まで愛国の道を歩むよう心を配った。

戦略的な一時的後退の時期、康良煜は慈江道満浦の疎開先で誕生日を迎えた。けれどもこの厳しい戦況の中で誕生祝いをするのは好ましいことではないとして、彼ら夫妻は、今年の誕生祝いは見送ろうとして、なんらの用意もしなかった。

ところが、その夕方、金日成主席が前ぶれもなしに康良煜の宿所を訪れたのである。

最高司令部からここまではかなりの道のりであり、その道も平坦ではない。康良煜は何か急務が生じたのではと思い、緊張した。

ところが主席は顔をほころばせて、「今日は先生の誕生日ではありませんか。それでお祝いに参りました」と言うのである。

彼は驚いて、「将軍、戦争のさなかですのに、誕生日とはまだ……」と言った。

主席は、いかに戦争のさなかではあっても、先生の誕生祝いはわたくしどもがしなければなりません、今は戦時ですから素朴に誕生日を送るほかありませんが、むしろこの日が忘れられぬ思い出として残るでしょうと言った。

厳しい戦時、それも大きな試練を経ている後退の時期だとして数十年苦楽を共にしてきた妻さえ誕生祝いを断念したにもかかわらず、この日を忘れずに祝いの品まで用意してきてくださった

主席の温情に胸がこみ上げ、康良煜は膳を前にしても、箸に手がつけられなかった。
　そんな彼に向かって主席は、どうしたのです、早く上がるのです、われわれがこの戦いに勝利して先生の誕生祝いをする時は、今日のことをなつかしい思い出として振り返ることになるでしょうと言った。
　それから数年の年月が流れ、終戦の翌1954年12月の誕生日、主席は康良煜の家庭を訪れた。
　その日の朝、夫人はわが子たちの手をかりて整えた膳を部屋へ運び入れた。
　ところが膳を前にした康良煜は、嬉しく楽しい気分よりも、なんとなく残念な、物足りない気持ちに駆られた。素朴ではあるが、とりどりの色合いの料理を見つめていると、この場に主席がおられたらどんなによいだろうかと思った。
　そんな思いにひたっていた彼は、杯に酒を注ごうとする妻を止めた。
「いや、朝から酒だなんて。今日みたいな日には、ひょっとして将軍がお見えにならんとも限らんじゃないか」
　妻は手にした酒瓶を下に置いて、口惜しそうに言った。
「陰暦の誕生日を祝っているのですから、陽暦では年々日が違ってしまい、一緒にいる人でさえちゃんと覚えていられないあなたの誕生日を、あのお忙しい日を送っていらっしゃる将軍がどうしていちいち記憶しておられるでしょうよ」
「うん、だけどな、解放直後にしてもそうだったし、戦争が起きた年にも、将軍はお出でになったじゃないか」
　夫の言葉にうなずいた妻は、じゃあ、今日のお昼将軍をお招きしたらどうかしらと言った。
「ばかなことを言うもんじゃない。全国が灰じんに帰し、将軍





は戦時よりずっとお忙しい時じゃないか。それにわしのような者の誕生日が何だといって、身の程もわきまえず将軍をお呼びできるのだ」
「だったら誕生祝いの膳を前にして、なんでそんな途轍もないことをおっしゃってるのです」
　妻のこの言葉に答えはしなかったが、康良煜の胸にはひそかな期待が宿っていた。主席は解放直後にもそうだったし、戦争たけなわのあの日もなんらの前ぶれもなしに訪ねてこられた。
　彼は解放直後の12月、自分の誕生日にわが家を訪れた主席の姿を思い浮かべた。
　その時、主席を真っ先に迎えたのは妻だった。
　この日第一の話題になったのは、20年前の彰徳学校時代の思い出だった。
　主席は康良煜夫人に向かって言った。
「奥さん、わたしは今でも、七谷で奥さんが炊いてくださったおから飯のことを折りにふれて思い出します。あの頃はずいぶんおいしく頂いたものです。20余年も他郷ですごしたので、お礼も言えませんでしたが、今日はそのお礼の挨拶をお受けになってください」
　夫人は当時、故郷が粛川だったので「粛川おばさん」と呼んで訪ねてくる主席に、貧しい暮らしのせいでおから飯しかもてなせなかったことが思い出されて、申し訳なさそうに言った。
「貧乏暮らしでお米のご飯を作れず、いつもおから飯しか出せませんでしたのに、そんなにもお礼ばかりおっしゃられて、面目次第もございません。おから飯がいくらおいしいと言っても、高がしれているではありませんか」
　彼女はこう言って、彰徳学校の頃のおもてなしを粗末にしたつ

ぐないを今日やっとできそうですとうれしそうに言って顔を輝かせた。

主席はこの日、彰徳学校時代を楽しく回顧しながら、康良煜の家族たちと一緒に愉快な時間をすごした。

こうして始まった恩師の誕生祝いはその後も続いた。

康良煜は、自分の如き者が礼をわきまえず、誕生祝いにお出でくださいと主席を招くのは失礼にすぎるとしてためらいながらも、それでもきっと来られるだろうという思いを捨てきれなかった。

いつしか時間は流れて夕食時になった。

けれども、夫人は台所で食器の音を出したり、かまどに火をくべたりしながらも食事の支度をしようとはせず、ただそわそわしていた。両親の気持ちを察してか、夕食をせかす子もいなかった。

そうこうしているうちに、不意に警笛の音に続き、家の前に車の止まる気配がした。

「将軍のお出でじゃないか？」

康良煜が窓を開けて見ると、妻とわが子たちは早くも外へ駆け出している。彼はあわてて庭へ飛び出した。

車を降りた主席は明るい微笑を浮かべて、夕闇に包まれた庭で出迎える家族たちの挨拶を受けた。

朝からずっと気持ちが落ち着かずそわそわし、空しい期待など断念しろと、何度も自分に言い聞かせていた康良煜であったが、こうして主席を出迎えてみるとどうしてお出でになったのだろうかとして、一時狼狽した。

彼のそんな気持ちを察したかのように主席は、遅くなって申し訳ありません、と言ってから、「先生の誕生日をお祝いします」と祝福の言葉を述べた。

康良煜は、お忙しい時間をお割きになってまでお出でくださいましして、なんとお礼を申し上げてよいか分かりませんと言った。





主席は、少し早く来ようとしたのですが、時間の都合がつかず遅くなってしまいましたと言って、外は寒いから早く中へ入りましょう、先生がこの家のあるじですから先に立つことですとして、康良煜を先立たせた。

部屋に入った主席は、夫人の差し出す座布団をかたわらに押しやり、朝鮮人にはこんなオンドルの床にじかに座る方がずっといいですと言った。気さくに床の上にあぐらをかいた主席は、ご夫人は今どんなことをなさっているのですかと聞いた。

妻が答えに窮してまごまごしているのを見て、康良煜が代わって女性同盟の仕事をしていますと答えた。

主席は、ご夫人はその間たいそう発展なされました、女性同盟の仕事をするのはとてもよいことですとたたえた。

この言葉に気を好くした夫人は、同盟の仕事を手落ちなくしてみようと努めてはいますけど、知識が乏しくて困っています、どうしたらうまくできるのでしょうかしら、よい方法があったら教えて頂けないでしょうかと言った。

主席は笑って、分からないことは勉強すればよいのです、『政治知識』などの政治図書を読むとよいでしょう、それらの本には誰もが知っていなければならない政治問題がちゃんと解かれていますと教えた。

主席を自宅に迎えた喜びにひたっていた夫人は、しきりに目くばせする夫の視線に気づいて我に返り、ではお食事に致しましょうと言った。

主席は、ああ、みなさんはまだ夕食前だったのですね、それは幸いでした、先生が今夜の誕生祝いの祝膳につかれるのを拝見できたら、わたしも本当にうれしく思いますと言った。

こうして出された膳があまりにも見すぼらしくて気まずい思いをしている夫妻に向かい、このように簡素な膳こそわたしの気持ちをなごませてくれますと言い、そわそわしている康良煜を膳の首座に着かせ、その横に夫人を座らせた。

家族たちをみんな部屋に呼び入れた主席は、毎年先生の誕生日を忘れることはなかったのですが、仕事に追われていつも訪ねるというわけにはまいりませんでした、けれども今後はきっと欠かさずお伺い致しますと言った。

実際主席は、解放後の国づくりの時も祖国解放戦争の時期や戦後の復興建設の時期も康良煜ら高齢の幹部の誕生日には忘れることなくきまって祝いの品を贈っていた。にもかかわらず、自らは、人民の誰もが祝う誕生日の宴も極力押しとどめ、人々が常食する雑穀飯を口にしながらも、幹部たちの生活にいささかの不自由もあってはと、常に温かく気を配っていた。

主席はその中でもとりわけ康良煜をいつも先生と敬称をつけて呼んで人々の前に押し立てたものである。

いつだったか、康良煜は主席に向かって、もうわたくしを先生とは呼ばないでください、全国の人民を温かく導き、教えておられる将軍こそ先生です、このわたくしがどうして先生だと言えましょうかと言ったことがあった。

すると主席は笑って、じゃあ、わたしは先生をなんとお呼びしたらよいのでしょうかと反問した。

康良煜は、わたくしは最高人民会議常任委員会の書記長を務めており、また年齢からすれば、わたくしは将軍と近しい戦友だった金策先生と同年輩です、昔はどうであれ、今わたくしの先生は、常にいろいろとお教えを頂き、導いてくださっている将軍でございます、と答えた。





すると主席は、彼の両手を取り、誰であれ幼い頃読み書きを教え、温かく指導してくださった恩師がいるではありませんか、わたしにしたってどうして恩師がいないと言えましょうか、歳月がいかに流れても、わたしは康先生を忘れることができませんと言った。

主席のこのような気高い道義について康良煜はもちろん知らないわけではなかった。それにしても自分の誕生日、それも陰暦の誕生日を忘れることなく祝って訪ねてくださる並々ならず気高い主席の道義にただただ感動するばかりだったのである。

この日、主席は50歳の誕生日を迎えた康良煜先生がその間国に尽くした功労が大きかったとして、彼の胸に手ずから国旗勲章をつけた。

4年前の疎開地における誕生日の出来事を感慨深く振り返った康良煜は、自分の誕生日を忘れず、ほとんど毎年訪ねてくださった金日成主席こそ、人民を教師として下にもおかず、心の底から愛民の念に燃えて国家・民族の富強繁栄に尽くす絶世の偉人だと感嘆してやまなった。

## 光を与え、熱を注いで

光と熱は、自然界の万物を躍動させる力の泉である。

とはいえ、万物に生命力を与える太陽の光も影を残すが、旧師に注ぐ金日成主席の温情は生活の隅々までくまなく及び枯れ木にも花を咲かせた。

康良煜はほとんど40年もの間、共和国政府の重職にあって活躍した。

この期間には、新朝鮮の礎を築く民主建国の時代もあり、祖国の運命を決する厳しい戦争の日々もあり、社会主義革命と社会主義建設の活気に満ちた年代もあった。

これらの日々、長い闘争の中で鍛えられた革命家でもなく、ましてかなりの年齢に達した身でわが責務を十分に果たすには力に余り、座り込んでしまいたいと思う時がどうしてなかったであろうか。だが彼は困難を前にしてくじけることなく、愛国の一路をまっすぐ歩み続けた。

ここに彼のそのいちずな心構えをよく見せる一つの話がある。

1971年4月15日、この日は金日成主席の誕生日であった。

このめでたい日、主席は康良煜夫妻を自宅に招いた。

お祝いの挨拶を述べる両人を喜んで迎え入れた主席は、どうぞお楽にと言って座を勧め、お子さんたちはみなお元気ですかと聞いた。

主席は、今外国にいるお子さんも元気で務めを立派に果たしているとして、その消息を伝え、ご両人も健康に気をつけて働かなければなりませんと、思いやりの言葉を述べた。

その当時、康良煜は国のスポーツ部門の指導も担当していたが、年のせいでその仕事にはあまり自信を持てないでいた。

彼は、年を取っても若い頃に燃やしていた愛国の熱情を冷ますことなく、国家・民族の富強繁栄をはかる愛国の一路を変わることなく歩むようにとしてスポーツ部門を担当する措置を取ってくださった主席の温情に感謝してやまなかった。

けれども寄る年波はいかんともしがたい。気持ちはやる気があっても、行動はままにならないのである。

それで彼はこの日、主席に訴えた。

「スポーツ部門はもう年が年で、思い通りに指導することができません。わたくしの考えでは、スポーツの指導は経験に富み、気も若い人に任せた方がよいのではなかろうかと思います」

主席はかぶりを振り、なんということをおっしゃるのです、今われわれの幹部の中に先生ほどスポーツに造詣が深く、能力のある人物がどこにいましょうか、スポーツ部門はこれまで通り先生が続けて担当すべきです、わたしも力の及ぶ限りお助け致しますから、わが国のスポーツをひとつ大きく振興させて見ましょうと言って、彼を励ました。

普通人々は、非凡な眼識をもって世界を洞察して豪胆な決断を下すことに、偉大な政治家としての主席の真面目があると評しているが、反面このように生活の細部にも細密な思慮をめぐらして、力を与え、勇気を奮い起こさせるということにも、主席の偉人としての特性を見出すことができるのである。

たとえ身体は老いても、愛国の精神は若い時代の生気を失ってはならないと力づける主席の深い思いやりが胸に沁みて、体内に力がもりもり湧くのを覚えた康良煜は、われともなく、昔ある詩人が、神童として人々の注目を浴びていた幼い年に、ある老人に請われて詠んだ一首の詩を胸中でそらんじたという。

老いた木に花が咲いたのに
何で気持ちが老いたと言えましょう

その日の午後、ある競技場でサッカーの試合が行われることになっていた。

主席は、老体の康良煜が観覧に出掛けるのは体にこたえるのではとおもんぱかり、試合を見に行くつもりなのですか、それより

も帰宅されてゆっくり休まれてはどうですかと言った。

すると彼は元気な声で、スポーツはわたしが受け持っていますから当然行ってみなければなりません、試合を見るのも休息ですから、ご心配には及びません、試合をできるだけ多く見ないと、スポーツの振興対策もそれだけ立てにくいのではないでしょうかと言った。

愛国主義は美辞麗句によって表現されるものではなく、行動つまり祖国と人民のためにわが務めを忠実に全うしていくことに具体的に現れるのである。

康良煜はこのような自覚のもとに、人民主権の強化と対外活動、スポーツの振興にわが情熱を傾注した。

既に老境に入った彼ではあったが、活力に満ちて働き生活するようにとして、光を与え熱を注ぐ主席の愛と温情は、時の流れと共に深まるばかりであった。

主席は彼に会うたびに、一にも二にも健康ですと念を押し、時には彼を伴ってわざわざ景勝の地を訪れて共に時間をすごし、彼が病にかかると、心配のあまり、外国の首班に電話を入れて、治療対策を相談したことさえあった。

1973年6月末、政府代表団の団長としてラテンアメリカのある国を訪問して帰った直後、彼は主席に呼ばれた。

執務室に彼を喜んで迎え入れた主席は、今回当の国と大使クラスの外交関係を結ぶことを合意して帰ったのは、全的に先生のすぐれた外交術によってもたらされたものですとして、今後とも対外活動を積極的に進めるようにと励ました。そして、旅の疲れでやつれた彼の顔色を見つめながら、対外活動を活発に進めるには健康が第一ですとして、家族と連れ立って休養所でしばらくお休みになることですと勧めた。





康良煜はその時になって、主席が自分の旅の疲れをおもんぱかり、しばらく休息させようとして自分を呼んだのだと知った。

いつもこんなにも自分のことを思ってくださる主席の温情に感謝しながらも、彼は休養所へ行くことは考慮して頂きたいと言ったが、主席は、今後とも対外活動を積極的になされなければならないお体ですから、健康がすぐれないと外国へ出張することに差支えが生じます、ですからすぐに出掛ける支度をすることですと言った。

老いると涙もろくなるというが、日と共に厚くなる主席の温情にこらえることができず、彼の目に涙がにじんだ。

数日後、康良煜は家族と共に休養地に到着した。

その日の夕方、当地方の現地指導に赴いていた主席が訪ねてきて夕食を共にし、宿所で不自由な思いをしている点はないかと尋ねた。何らの不便も感じていないという返答に、生活上ささいな不便があってもすぐ指摘することです、この湖には魚が多いので、船を一隻用意して差し上げるように致しますから、明日からはその船に乗って釣りを楽しむことです、休養期間は仕事のことをお考えにならず、ゆったりして毎日楽しくおすごしになったら、休養の甲斐があります、と言った。

翌日、主席は約束を違えず船一隻と釣り道具を康良煜に送ってよこした。

70の年を間近にして若返ったかのように、たとえようもなく大きい感激と歓喜、幸福感など人間らしい情緒の絶頂を初めて実感している休養生活の中で彼は、遠い外国への出張中に重ねた疲労をきれいに拭い去り、若者のような精気にみなぎって職務に精励した。

康良煜に注がれる主席の恩愛と温情は、彼が生を終える最後の時期まで変わりなく続いた。

彼が生涯の最後の誕生日を数日後に迎えることになったある日

の朝、主席は入院中の彼に電話を掛けた。
老病に効く名薬なるものはあるはずがなく、康良煜の病勢は日に日に傾いていた。
彼の入院後毎日二度、三度と電話を入れていた主席はこの日も、彼の病状が気にかかり、早朝、電話で誕生日が数日後に迫っている今、病勢が好転したら家族たちの気持ちも少し軽くなるのではなかろうかとして、治療に最善を尽くすようにと強調した。
その恩愛が不死の薬となり、康良煜は78回目の誕生日を迎えることができた。
それゆえ康良煜は、国の解放直後から生を終える最後の時期まで愛国の一路を毅然として歩み続けることができたし、臨終を前にしては、自分が果たし得なかった報恩を併せて、偉人中の偉人である金日成主席と金正日国防委員長から受けた大恩に必ず報いるようにという遺言をわが子たちに残した。
康良煜が世を去った時、金日成主席と金正日国防委員長は、故人の遺体を納めた霊屋を訪ねて哀悼の意を表した。
金日成主席は、康良煜先生は彰徳学校時代のわたしの恩師でした、それでわたしは先生をずっと忘れることなく共にすごしてきました、先生は彰徳学校の時に別れた後解放直後に再会してから今日に至るまで、平凡な日々も試練を経ていた日々もわたしに会って話を聞くことを最も喜び、なんか特別な食べ物が生じると、わたしを接待したいと心を煩わせたものでした、それがおそらくかつての担任教師の心情だったようです、と声を曇らせて話した。続けて、来年の初冬には康良煜副主席が満年齢で傘寿を迎えるはずでしたのに、なんとも残念なことです、もう少し生き永らえておられたら、傘寿の祝膳をお受けになられたでしょうにと言って、お悔やみを述べた。





この日、金正日国防委員長は、康良煜副主席は彰徳学校時代金日成主席の担任先生でした、けれども副主席同志は主席を弟子としてではなく、常に偉大な師とし、慈父として信頼し、従ってきましたとして、故人の輝かしい一生をたたえた。
康良煜は既に世を去り、生きてはいなかったとはいえ、故人を忘れないでいる金日成主席と金正日国防委員長の追憶は歳月の流れと共にいよいよ深まった。
愛国烈士陵が造営された時、康良煜副主席を忘れることなく、その遺骨を愛国烈士陵に移すようにはかり、機会あるたびに故人を追憶していた主席は、1990年4月20日母校彰徳学校を訪れて、あの当時、康良煜先生はわたしの担任先生だったが、オルガンを弾いて歌を教えてくださった先生の姿が今もありありとまぶたに浮かびます、康良煜先生はわたしの彰徳学校時代の忘れがたい恩師ですと今一度故人を偲んだ。

## 愛と温情は代を継いで

歳月は流れても、血縁の関係以上に深くも厚い金日成主席と金正日国防委員長の人間愛の美徳は、康良煜の孫子たちにも変わりなく及んだ。
わが国における社会主義建設が進捗していた1950年代末、康良煜の家庭では、次男の結婚式が挙げられた。
国の解放直後、反動勢力のテロに遭って長男と長女を失った康良煜夫人にとって、次男の婚礼は人一倍の喜びだった。その幸福感と喜びにひたりながら彼女は、先立たれた長男長女の分までという思いをこめて、次男の婚礼用に用意しておいためおとひさご

を祝膳に載せた。

昔から朝鮮では、わが子が婚期に至ると、両親は温かい日差しの注ぐ春の日に、石垣の日当たりのよい根方にひさごの種を植え、秋、そのつるの葉が石垣を覆うと、そこに生った小さなひさごを丁寧に取り、大切にしまっておく。それを式日を前にして縦に二つに割り、片方のひさご（雄ひさご）には青糸をつけ、今一方のひさご（雌ひさご）には赤糸をつけ、この二つを合わせてハクンバク（めおとひさご）と呼んだ。婚礼を挙げる時このひさごに酒を注ぎ、新郎新婦が同時に飲むのは、共白髪を誓って鴛鴦の契りを結ぶ奥ゆかしい朝鮮風の結婚の礼式である。

婚礼後幾日も経たず、康良煜の家族はまた大きな慶びごとにひたることになった。

金日成主席が新婚の夫婦を祝って、康良煜の一家全員を自宅に招待したのである。

庭に立って一同の到着を待った主席は、彼らが姿を見せると、わざわざお出でを願って申し訳ありません、その間みなさんにはお変わりありませんでしたかと挨拶した。

康良煜は、多忙な時間をお割きになってわたくしどもをお招きくださり、なんとお礼を申し上げてよいか分かりませんと言った。

主席は、先生が嫁御さんを迎えたことをお祝いして一度席を共にし、喜びを分かち合おうと思いながらも、こんなに遅れてしまい申し訳ありませんと了解を求めて、一同を部屋に案内した。

みなそれぞれ座を占めると、主席は新婦に向かって、今どこでどんな仕事をしているのかと尋ねた。

金日成主席に初めてお目にかかった彼女は顔を赤らめ、もじもじして、すぐに答えることができなかった。

康良煜が彼女に代わって、嫁は平壌音楽大学（当時）を卒業





し、その大学の教員に採用されたばかりですと説明した。

主席は大きくうなずき、それはよかった、音楽をはじめ国の芸術を花咲かせるためには、音楽大学で優秀な人材を大勢育成しなければならない、音楽大学は音楽家、アーチストを養う原種場のようなものだと言った。

主席は、立派に育った康良煜の子たちを満足げに見回して、今では先生のお子さんたちがみんな大きくなり、それぞれ革命の持ち場で熱心に働いており、また嫁を一家に迎えて、家庭がにぎわっているので、わたしの気持ちもなごみますと言った。

しばらくして主席は一同を見回し、粗末なものだが、食事を共にしながら話を致しましょうと言って立ち上がった。

主席は、嫁を迎えた先生のご家族のみなさんとこのように席を同じくできて喜びにたえません、先生とご夫人の健康のために、ご家族の幸せのために祝杯をあげましょうと言った。

康良煜は、主席の健康を願って先に祝杯をあげるべきにもかかわらず、それより先に主席の祝いの酒を受けてしまったことにうろたえて席から立ち上がり、主席のご健康をお祈りして祝杯をあげたいですと言った。

主席は有難うと答え、みなさん、遠慮しないでたくさん上がることですと何度も勧めた。

主席は、歳月の流れはなんとも早いものです、わたしが祖国に帰り、先生のお子さんたちに初めて会ったのが昨日のことのように思えていたのに、はや結婚をするまでになったのですねとして、10年なら山河も変わると言われているのに、もう15年近くになったのだから人間も変わり、山河も変わったと、深い感慨をこめて言った。

主席は康良煜に向き直り、先生は解放直後から今日に至るまで

われわれを助けて多くの努力を傾けてこられました、今後とも一層ご活躍なさってくださるものと期待しますと言った。

この日、主席は康良煜夫人にも思いやりのある言葉を掛けた。

主席は彼女に目を向けて、今も平壌市女性同盟の仕事を続けているのですかと尋ねた。

いつだったか遠い以前に申し上げたことを忘れずに尋ねられたことが嬉しくて、彼女はこっくりうなずき、今も続けていますと答えた。

主席は、家庭の主婦としてはもとより、国と民族に尽くす愛国の道でも誠実な努力を傾けている彼女を頼もしげに見やり、首都の女性たちを社会主義建設に積極的に参加させるよう、指導を入念に行うことですと励ました。

主席は別れを惜しむみんなの気持ちを察して、彼らと一緒に新作の劇映画を観覧して一家の幸せを祝福した。

その1年後、主席は康良煜の家庭を訪れて、間もなくお子さんたちが結婚して孫たちが生まれたら家族が増えるわけですから、新たに家を建てることにしましょう、これは以前から考えていたことですが、新宅を2階建てにして間数を増やすとよいでしょうと言い、一家の生活の隅々に至るまで気を配った。

主席は、孫子の代までも国と民族のためにそれぞれの才能を十分に発揮して生きるようにと温かい配慮をめぐらした。

希望通り教壇に立って、アーチストの育成に情熱を傾けていた康良煜の嫁がある日、主席に呼ばれた。

彼女の教員生活についていろいろと尋ねた主席は、今大学にピアノが何台備わっているのかと尋ねた。彼女の返答を受けた主席は、大学へ大型ピアノを贈ることにしたが、ピアノの先生が見て選ぶとよいだろうと言って、ピアノが置かれてある所へ行





き、1曲弾いてみるようにと言った。

彼女は椅子に腰かけて、演奏を始めた。室内には情緒に富んだメロディーが静かに流れ始めた。

やがて演奏を終えて立ち上がり一礼した彼女に向かって主席は、ピアノの演奏が実にすばらしい、並々ならぬ腕だとたたえて、そこにある2台のピアノを指し、どちらがよかろうかと聞いた。

「はい、どちらの方も申し分ありません」

この返答を聞いて、主席は随行の幹部に、ピアノの先生の意向通りにピアノを選んで大学へ贈るようにと指示した。

1969年10月のある日にはこんなこともあった。

この日、主席は康良煜の次男夫婦を自宅に呼んだ。

当時、康良煜の次男は東欧のある国へ出掛けて仕事をすることになり、出発が数日後に迫っていた。

二人が部屋に入ると、主席はにこにこして座るようにと言い、いつ出発するのかと聞いた。

主席は、その国は気候がよく、農業も進んでいるなどと、当国の事情を説明した上で、子供たちを連れて行く点など生活上の問題や職務に関わる問題について注意を与えた。そして、細君はピアノが上手だから外国人たちから喜ばれるだろうとし、体に気をつけ、任務を立派に果たして帰るようにと言った。

康良煜の次男はこの日、主席の志に沿って国家・民族の富強繁栄をはかる道で愛国の至誠を尽くそうと固く心に誓った。

金日成主席はその後も、彼が両親の跡を継いで、国家・民族のための愛国の一路をたゆみなく歩むよう配慮した。

主席は、外国の諸代表団を接見する席に彼をしばしば呼んだものである。

1992年8月20日、アメリカ全国キリスト教教会協議会代表団に

会った際、主席は、康良煜について回顧した。

そして、その場にいる康良煜の子息を代表団の人たちに紹介した。

金正日国防委員長は、金日成主席が康良煜とその子女たちに注いだ愛と温情を忘れずに、康良煜の孫子たちが国家・民族の富強繁栄と愛国の一路を変わりなく歩むよう温かく導き、康良煜の子息の誕生日には、毎年祝いの膳を贈り、職務上ささやかな業績を挙げても高く評価した。彼の妻が死亡した時は、彼女が金元均平壌音楽舞踊総合大学で教鞭を取り、才能豊かなアーチストを大勢育てたとたたえ、彼女の葬儀を立派に行うようにとして、温情ある配慮をめぐらした。

金日成主席と金正日国防委員長が康良煜の一家にめぐらした愛と温情は、今日、敬愛する金正恩（キムジョンウン）総書記によりそのまま受け継がれている。

金正日国防委員長が2011年12月に急逝し、全国の山河が大きな悲哀に沈んでいた当時、康良煜の子息の死を聞いた金正恩総書記は、故人を悼んで葬礼を立派に執り行い、遺骨を愛国烈士陵に安置するようはからい、父親と並んで愛国烈士として生き続ける生を享受するよう配慮した。

金正恩総書記はその孫子たちにも深い関心を向け、祖父や父親と同様に国家・民族の富強繁栄のための道で純潔な良心と信義を全うするよう温かく導いている。

康良煜の子孫や親族たちは今もこう言い合っている。

「わが一家親戚を広い胸に抱いて育ててくださり、国を愛し民族を愛する道へ導いてくださっている絶世の偉人たちの信頼と恩愛に、代々変わりなく愛国の真情をもって報いることがわが一門の信義であり道理である」



**金日成主席と恩師**

執　筆：呉明金
編　集：安鉄鋼
翻　訳：金時習
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
　　　　外国文出版社
発行日：2025年6月

ㄱ-250880303943

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp